

---

# 魔法少女リリカルなのは 零の軌跡

ラプラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 零の軌跡

### 【Nコード】

N2520X

### 【作者名】

ラプラス

### 【あらすじ】

とある静かな街で普通の高校生活を送る一人の少年がいた。

しかも、彼は神の悪戯により交通事故に巻き込まれて死んでしまう。死んだ後の少年は一人の男性『神』と出会う。

神は少年に一言告げ、『魔法少女リリカルなのは』の世界へと転生させた。

転生させられた彼の運命は！？

そして、神から告げられた言葉とは一体！？

これはそんな一人の少年【高峰 宗一】が描く一つの物語である。

く神に導かれし者く（前書き）

初めまして、ラプラスです！

小説書くのは初めてです。

全然出来は良くありませんが、一生懸命書きます。  
応援よろしくお願いします。

く神に導かれし者く

ピピピピッ．．．ピピピピッ．．．

????? 『ふあゝ．．．ん、朝か?』

と言いながら目覚まし時計に手を伸ばす少年．．．が、《ドサッ》  
落ちてしまう。

????? 『はあ．．．毎日ベッドから落ちてると、目覚まし時計の役  
目を忘れてしまうな。』

少年は立ち上がり部屋を出る。リビングで朝食を探す。

????? 『朝飯は．．．っと、パンがあるな。』

そして、パンと牛乳という一見可哀想な朝飯を食べた。

その後、少年は制服に着替えて歯磨きやらを済ませ学校へ向かう．．  
はずだった。

女の子「ママあゝっ!! 助けてえ!!」

道路の真ん中で助けを求める女の子。しかも猛スピードで走るトラ  
ックが近づいている!

????? 『っ!?!? あ、おい!．．．ったく、間に合ええゝ!!』

《ドガシャン》と大きな音が鳴り響いたのだった。

この日、【高峰 宗一】という一人の少年の人生が終わった。

く神に導かれし者く（後書き）

まずはプロローグからはじめました。  
今後もなにとぞよろしくお願いします。  
それではまた次回お会いしましょう！

く神それは全ての始まりく（前書き）

さて、今回は神様登場！

まさかの展開！？

それではご覧下さい。

く神それは全ての始まりく

く宗一 sideく

『ヒカレタ!?俺、トラックにヒカレタ!?でも痛みなども特には感じなかったし．．ふむ、もしかすると人とは死ぬ時何も感じないのかもしれないな。』

などと俺は呑気に考え事をしていた。

『しかし、ここは何処だ?周りは真っ暗で何も見えないし、足場も分からないから進もうにも進めない．．』

なんて独り言を言っていると．．

???『そこで何をしているんだね?【高峰 宗一】よ。』

暗闇のおくから誰かの声が!

俺は恐る恐る声のする方へ足を進めた。

『なっ、なんだ?それに俺の名前まで．．』

???『まあまあ、落ち着きたまえ。そして今から私が言うことをキチンと頭に入れるのだよ?』

いきなり俺の目の前に一人の男性が現れ話しかけてきた。

『あ、アンタ誰だ?今話しかけてきたのはアンタか?』

???? 『いかにも、私だよ高峰 宗一』

『アンタ何者だ？俺の名前まで知ってるし．．．俺はアンタみたいな人見たことないぞ？』

???? 『私はリヴェル。一応神様とやらをやっている。』

男性は平然と受け答えやがる。「神様」！？バカにしてるのかコイツ。笑えるぜコノヤロー！

リヴェル『別に馬鹿になどしてないさ、ただ事実を言ったまでだが？．．．ああ、いきなりで驚いたかい？』

心読まれた！？そんなまさかーん！

『（驚いたかい？）じゃねえよ！神様？存在するのかよ！？．．．まあ、アンタの顔を見る限りでは嘘とは思えないがな。』

リヴェル『ほお、信じるか。ではまず君についてだが．．．君は死んだんだよ。』

『ああ、トラックに下敷きにされたんだろ。だからなんなんだ？俺に転生しろとも言うのか？』

リヴェル『君は超能力者かい？．．．まあいい、そうだよ。君にはこれからとある世界に転生してもらう。』

『まっ、マジかよ！転生？．．．んで、その世界ってのは？』

リヴェル『「魔法少女リリカルなのは」の世界だよ！』

『．．．なにそれ？』

リヴェル『はい？知らないのかい？』

『ああ、聞いたこと無いな。』

リヴェル『ま、まあいいさ。それで、君には今からその世界に行き、世界の危機を救ってもらいたい。』

『は？世界をだ？．．．救う？』

リヴェル『いきなり何を言っているのかと思うかもしれないが、どうか頼む！』

『．．．わあつたよ。行きやいいんだろ？』

リヴェル『ほ、本当か！？』

『拒否つても無理なんだろ？それに、こんな場所にいるよりマシな感じるしな。』

リヴェル『あ、ありがとう！』

『はいはい』

こうして俺は「魔法少女リリカルなのは」の世界に行くことになった。

おい、神様が俺に頭下げたぞ！どうせなら土下<sup>グシュー</sup>ずす、スンマセン．．

宗 | s i d d e o u t

く神それは全ての始まりく（後書き）

なるべく更新速度はやめたいです！

まあ、いろいろプライベートも忙しくてね。

それでは次回『く転生前にく』お楽しみに！

く転生前にく(前書き)

本当に一つ一つが短いなf^\_^| ^\_^;

でも気にしたら負けだね！

それではどうぞ。

く転生前にく

リヴェル『それでは転生するに当たって準備をしよう。』

宗一『ずいぶん張り切ってるな、神様さん。』

リヴェル『そりゃそうさ、君という救世主に巡り合えたのだからな  
』！

宗一『あはは．．．』

それからしばらくして準備が整ったようだ。

リヴェル『準備完了！いつでも転生させられるが、最終確認だ。いいね？』

宗一『ああ、どうぞ神様さん！』

リヴェル『まず一つ目、今から君に言ってもらう世界には魔法という物が存する。デバイスというものを使い魔導師間での戦闘が度々行われている。』

宗一『デバイス？武器の一種か？』

リヴェル『ああ、デバイスには（アームデバイス）（インテリジェントデバイス）（ユニゾンデバイス）などがある。インテリジェントデバイスにはAIが組み込まれている。ユニゾンデバイスとはその名の通りユニゾンして魔力などを上昇させたりする。これは君が選んでくれ。』

宗一『それじゃ、インテリジェントで！AIは女性な。』

リヴェル『了解した。次に、君の魔力などについてだが・・・全てEXにしておく。念のためデバイスと君自身に5個ずつリミッターをつける。その時の状況に応じて解除するといい。』

宗一『え、EX！？ほぼ敵なしじゃんか！いいのか？』

リヴェル『まあな。だがしかし、それなりに体への負担は大きいから気をつけるよ！』

宗一『了解！後は？』

リヴェル『希少能力で「神の目」を持たせるよ。』

宗一『神の目？どんな能力なんだ？』

リヴェル『それは一度見たことを全て完全にコピーすることができ  
る。』

宗一『反則じゃね？それ。』

リヴェル『君には世界を救ってもらわなければならない。そう簡単に死んでもらっては困るのでな。』

リヴェルは少し悲しげな表情だった。

宗一『ありがとうさん！んじゃ、そろそろ行くわ。・・・いろいろサ  
ンキュー神様！』

リヴェル『ふん、礼を言うのは私の方だよ。ありがとう。』

そついうとリヴェルは指を鳴らした。

宗一『へっ?・・・うつ、うわぁ〜!?!?』

リヴェルが鳴らした音と同時に宗一の足ものに穴があき、宗一は落ち行つた。

リヴェル『はあ・・・さて、後は頼んだぞ救世主よ。』

そつ言つてリヴェルは消えていとた。

く転生前にく(後書き)

毎回ありがとうございます、本当に感謝感謝です！

それでは次回『く新たな一歩く』お楽しみに！

く新たな一歩く(前書き)

たあし、しあしあ海鳴！

あしあ。

〈新たな一歩〉

〈宗一 side〉

『ん、んっ．．．じ、じは？』

俺ははとある公園の砂場に倒れていた。

『あいたたたっ。まったく、リヴェルめ！こんなとこに落とすなよ！砂だらけじゃねえかよっ！！』

そんなことを言いつつ歩きだした。

『ん、どうしたものかな。』

『？？？』お助けしましょうか？マスター。』

いきなり耳に入る女性の声。

『え？な、なんだ？どこから．．．？』

『？？？』ここですよマスター。』

よく身体を見回すと首にかけてある十字架のネックレスが薄く光っていた。

『君かい？俺を呼んだのは。』

『？？？』はい、正解ですよ。マスター、私に名前を与えてください。

』

『な、名前？まだ無いのか？．．．んうゝ、どうしようかな？』  
しばらく考え、そして。

『よし、お前は今日からゼロだ！』

ゼロ『了解しました。ありがとうございます、我が主。』

『それじゃゼロ、ここは何処だ？』

ゼロ『ここは（魔法少女リリカルなのは）という世界の地球。海鳴市です。』

『そうか、ありがとう。』

ゼロ『いえいえ。』

『さてと、少し歩きますかね？』

そう言って再び歩きだした。

（宗一 side out）

宗一『ふうゝ、一休み一休み。』

そう言って近くの自動販売機で飲み物を買う。

金？ああ、親切なりヴェル様がゼロに大金を持たせてたらしいんだよ。

ゼロ『マスター、今日はもう遅いです。泊まる場所を探しましょう。』

宗一『わかったよ。それじゃまた明日いろいろ見て回る。』

そして宗一は宿を探しに行くのだった・・・が、

宗一『ああ！俺身長縮んでるし年齢とかも・・・宿、見つかるのかな？』

頭を抱えていました。

く新たな一歩く（後書き）

睡魔になんか負けないぞ！

次回『く少女達との出会い』お楽しみに！

少女達との出会い（前書き）

ついにあのキャラ達が！

やはり一つ一つが短いな。

でも気にしたら負けだ！

それではどござ。

## 少女達との出会い

翌日、宗一は海鳴の街を歩いていた。なぜか周りからの視線が痛い。それは宗一の容姿のせいである。宗一は肩に掛かるくらいの黒髪、黒い瞳、整った顔立ち。黒いジーンズにメンバー。白いシャツの上に黒いジャケットを着ている。

宗一『なあゼロ、周りからの視線が痛い。』

ゼロ『マスターはまず念話を覚えてください。』

宗一『念話?』

ゼロ『はい、心で念じて私と話せます。』

宗一『・・・(こ、こうか?)』

ゼロ『(上出来です!さすがマスター!)』

宗一『(ゼロ、まずは腹を満たしたい。美味しい飯が食べれる店を探してくれ。)]』

ゼロ『(わかりました・・・それでは、この道を少し進むと「翠屋」という喫茶店があります。とても人気な店らしいですよ。特にシュークリームと紅茶が人気です。)]』

宗一『よし、んじゃ行きますか!』

そして宗一は走り出した。

「?????side」

私、高町なのは9歳、聖祥大付属小学校の四年生です！

今日は土曜日で学校が休みなので友達と喫茶翠屋で集まっています。フエイトちゃん、はやてちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん。それから私の計五人です！

この店はお母さんの高町 桃子さんとお父さんの高町 土郎さんがやっていて、とっても美味しいものばかりなの！

そんなことを考えながらみんなで話していると・・・

《ガチャッ》

お客さんがきたの！

桃子「なのは、今手がはなせないからお客さんお願い！」

と、お母さんに言われました。

「はい！わかったあ。にやはあ、みんな、少し待っててね。」

フエイト「うん。わかったよ、なのは。」

はやて「はよ行かな、お客さん困ってるでー！」

アリサ「そうよ！なのは、急ぎなさいっ！」

すずか「そつだよ、まってるからね」

「ありがとうー！じゃあ、行ってきます。」

そう言ってさっき入ってきたお客さんのところに行きます。

『す、すみません！何名様で、す．．．か？』

つい喋るのを止めてしまいました．．．だって、

宗一『ああ、一人だ。今は．．．忙しいかな？』

そう言いながら少し首を傾げて微笑んできました。

『いつ、いえっ！！そんな．．．全然／／／／』

そう、だってそのお客さんはとってもカッコいい人だったんだもん  
／／／／

宗一『あの、お忙しいのでしたら持ち帰りでも「いえっ！ご案内し  
ますっ／／／／」．．．そう？ありがとう（にこっ）』

『はづうう．．．／／／／（かっこいいよお）』

顔が真っ赤になってしまいました／／／／

（なのはsideout）

その後、緊張しながら彼を席まで案内しました！

なのは『あ、あのぉ、ご注文は？』

宗一『んうゝ、じゃあシュークリーム二つにミルクティーで。』

なのは『か、かしこまりました！少々お待ちくださいっ！』

そうしてなのは走って行った。

（五分後）

なのは『お待たせしました、シュークリーム二つにミルクティーです。ごゆっくり……。』

宗一『ありがとう!』

そして、また彼は微笑んできました。

なのは『はううう。。。／＼／＼／＼（反則だよお）』

それからなのは再び四人の友達がいる席に戻った。

なのは『はあ。。。』

フエイト『ど、どづしたの？なのは。』

はやて『なのはちゃん、かっこいい男の子でも見つけたんか？』

なのは『はわわわわあっ!』

はやて『ず、図星やったんか？』

アリス『で、どいつよ!？私が見極めてやるわ!』

すずか『あ、アリスちゃん落ち着いて。ねっ?』

なのは『あ、あの角っこの席の男の人．．．。』

なのはの言葉に皆が一斉に宗一を見た。

ゼロ『マスター、複数の視線を感じます。』

宗一『視線？』

宗一は周りを見渡す．．．そして

な・フ・は・ア・す『あっ．．．。』

五人と宗一の目が合う。

宗一『（あっ、さっきの注文聞いてくれた子か。（）』

宗一は軽く微笑んで再び紅茶を口にする。

な・フ・は・ア・す『．．．／／／／（かっこいい）』

これが宗一と少女達の出会いだった。

く少女達との出会いく（後書き）

ハーレム万歳！

次回『くチカラ目覚めるく』お楽しみに！

くチカラ目覚める (前書き)

少女達の気持ち、そして目覚めるチカラ

やっとうです。ぶじぶじ。

くチカラ目覚める

宗一はしばらく翠屋で時間を潰していた。

宗一『ふうく．．．さてと、そろそろ帰りますかね?』

そう呟きながら立ち上がる宗一。

会計を済ませようと一人の女性に声をかける。

宗一『あつ、あのお．．．』

桃子『はい?．．．あらつ、何かしら?』

宗一『会計をお願いします。』

そして宗一は翠屋を出て行った。

くなのは達 *side*く

アリサ『あつ!アイツ会計済ませて出て行ったわよ!?』

フェイト『みんなで追っ?』

なのは『にやははっ、いいよフェイトちゃん．．．それにしてもあの人．．．』

はやて『なのはちゃん、惚れてもったか?』

なのは『ちっ、違うよっ／＼／＼／＼』

アリサ『説得力ゼロね．．．』

すずか『あはは．．．でも、あの人何歳くらいなのかな？身長もそんな高くないから私達と近いのかな？』

はやて『そやね、でもウチらの学校の男子達より断然よかつたわあ  
／／／／』

アリサ『そつ、そうね．．．私も認めるわ／／／／』

なのは『にやははあ．．．／／／／』

フェイト『は、話して見たかつたな．．．／／／／』

そんなことを話していると．．．

桃子『彼、13歳だって。みんなと一つ違いねっ！』

桃子さんが話しかけてきました。

な・フ・は・ア・す『えっ、ええええっ！？』

なのは『お、お母さん本当？』

桃子『ええ、帰り際に聞いたのよ。それに、彼なかなかっこいい男の子ね！それに彼女とかもいないらしいわよ！．．．フッフ、よかつたわねみんな。』

そう言つて桃子さんは仕事に戻りました。

な・フ・は・ア・す『彼女．．．いないんだあ／／／／』

と私達はは妄想の世界へ沈みました。

〈なのは達 side out〉

〈宗一 side〉

あれから俺は緑の木々が生い茂る森の奥に来ていました。

『ゼロ、準備はいいか？』

ゼロ『はい、いつでも！』

『そうか。それじゃさっそく．．．』

そう言つてネックレスを手で軽く握る俺。

『ゼロっ！．．．セットアップ！』

『Yes my master．．．Standby ready』

そして宗一は光に包まれていった。

〈宗一 side out〉

くチカラ目覚める（後書き）

ついにゼロをセットアップ！

次回『くチカラの意味』お楽しみに！

くチカラの意味く（前書き）

宗一の修行始まりました！

応援よろ！

それではどうぞ。

## くチカラの意味く

光に包まれた宗一。

やがて光は止み、姿があらわになる。

宗一『・・・よしっ！違和感もないし、成功か？』

ゼロ『はい！さすがですマスター。シンクロ率100%です！』

宗一の姿は、赤い襟付きのシャツに白いズボン、黒いロングコート。コートには所々に白いラインがある。右手には少し長めの杖。全体が黒く杖の先は赤い球体に黒い鳥が覆いかぶさったような形をしている。

宗一『それじゃ、ゼロ！俺に魔法の使い方などをおしえてくれ。初めてなものでね、ある程度慣れるまでよろしく！』

ゼロ『Yes my master』

こうして宗一の修行が始まる！

宗一『なあ、ゼロ。』

ゼロ『なんででしょうか？』

宗一『・・・チカラとは何だろうか。チカラを持つということとは・・・  
どづいつことだろうか？』

宗一はしばらくの期間修行をしているうちにそんなことを呟いた。

ゼロ『チカラ．．．ですか？』

宗一『ああ．．．』

ゼロ『．．．それは人それぞれに違った答えがあるでしょう。しかしながら、チカラとはただ無闇やたらと振り回せばいいものではありません。マスターはリヴェル様から大きなチカラを与えられた。リヴェル様は何も言いませんが、そのチカラにもまた意味があるはずです。マスター自身、今後の修行で己のチカラの意味をみつけましょう．．．ただ．．．』

宗一『ただ？』

ゼロ『あなたがこの世界に来た理由はなんですか？』

宗一『．．．世界を．．．救う．．．』

ゼロ『そうです。マスターはこの世界を救う者として転生さるました。これから先、たくさんの出来事に巻き込まれるかもしれませんが、その中でマスターはっ（わかったよ．．．）えっ？』

宗一『己の道を切り開く。己の信念を貫き通す。己の壁を乗り越える。チカラとは、己が自分自身で成長するためにあるものかもしれない。そりゃ、チカラは勝つために必要だとか言う奴らもいるかもしれない．．．でも、自分が強くならなければ、チカラなんて．．．無意味だからな。』

ゼロ『マスター．．．』

ゼロはそんな宗一の言葉を聞いてまるで頷くかのように呟いた。  
それから修行はしばらく続いた。

そして彼らは気づかない・・・《ガサツガサツ》・・・ゆっくりと  
忍び寄る足音に。

くチカラの意味く（後書き）

忍び寄る足音？

なんじゃそりゃ！

次回『く迫る敵の影く』お楽しみに！

〜迫る敵の影〜（前書き）

敵さん登場！

聞かされる悲しき真実。

どろどろ。

く迫る敵の影く

く宗一sideく

『ふあゝ．．．休憩。』

ゼロ『お疲れ様ですマスター。それにしてもマスターの成長ぶりにはおどろかされます。』

『そんなことないぞ？ゼロの教えがいいんだよ。』

ゼロ『ありがとうございます。』

仲良く話していた．．．がつ！？

《パシユンパシユン》

ゼロ『マスター、避けて！』

『ほいよつと！』

《ドガン》

『な、なんなんだ？一体．．．』

ゼロ『強力な魔力．．．来ます！』

そして煙が止み目の前には一人の男が。

????『やあ、私は【シユバルツ・コーネル】．．．君を殺しに来

たよ【高峰 宗一】。』

（宗一 side out）

宗一は一人驚き目を見開いた。

宗一『誰だアンタ．．．な、なぜ俺の名を知っているっ!?!?』

シュバルツ『フハハハっ！なに、簡単なことさ。．．．【リヴェル】  
、と言えはわかるかな？私は彼を殺しに奴のアジトへと出向いた。  
奴を殺した後に君がこちらに転生させられているのを知った。』

《ブチッ》

宗一の頭から何か切れたような音がした．．．

↳迫る敵の影〜(後書き)

リヴェルさんが・・・

悲しいぜ！

次回『オリキャラ設定』よろしくね！

〽オリキャラ設定〽 (前書き)

なんか、やっとな感じですよ。

一応オリキャラ設定。

詳しくはまた後ほど。

それではどうぞ。

## 〱オリキャラ設定〱

〱高峰 宗一〱 『タカミネ シュウイチ』

12歳 145センチ 36キロ

Strijers編

19歳 175センチ 65キロ

魔力量：EX

魔力光：白銀

魔導士レベル：EX

ミッドチルダとベルカの混合魔方陣を展開する。

容姿：肩にかかるくらい黒髪、黒い瞳をしていて整った顔立ちである。（自覚なし）

バリアジャケット：赤い襟付きのシャツに白いズボン、黒いロングコート。コートには所々に白いラインがある。

デバイス：ゼロ

漆黒の杖。先は赤い球体に鋭いクチバシを持つ鳥が覆いかぶさったような形をしている。

レアスキル  
希少能力：神の目（God Eyes）

神の目で見たことはなんつも全てを完全にコピーできる。

幼くして両親を亡くし、一人暮らしをしていたが・・・  
リウエル  
神様の悪戯

により死亡！それから転生させられた。

使用魔法？ 龍牙一閃

赤黒い炎のようなものを剣に纏い、相手に勢いよく飛ばす。

使用魔法？ 火炎龍波斬

赤黒い炎のようなものを剣に纏い、振る。大きな龍が現れ敵を飲み込む。

使用魔法？ デスブレイカー

真っ黒な光を杖の先に集め発射する収束魔法。強力過ぎるため、滅多に使わない。

使用魔法？ ????

使用魔法？ ????

使用魔法？ ????

使用魔法？ ????

くリヴェルく（神様）

普通の神様

世界を救うべく、宗一を転生させた。

シュバルツにアジトを知られ殺される！？

〈シュバルツ・コーネル〉

歳などは不明だが、若くは無い。

ミッドチルダ式

魔力SSS

リヴェルを殺し宗一 existence を知り追いつめる。

くオリキャラ設定く (後書き)

詳しくはまた後ほど。

次回『く怒り、そして悲しみ』 お楽しみに！

く怒り、そして悲しみ（前書き）

彼は泣く、友のために。

彼は怒る、友のために。

さていよいよ戦闘！

それではさよう。

く怒り、そして悲しみく

く宗一sideく

え？死んだ？リヴェルが？．．．

『な、なに言ってるんだよアンタ。全然笑えねえよ！．．．リヴェルが死んだ？あいつは神だぞ。そんな簡単に死ぬかよ！ふざけんなよ、アンタみたいなやつにリヴェルは倒せネエよ！！』

俺はなんだか混乱してきた。

シュバルツ『フハハハっ！面白い。しかし高峰、もしもこの私が．．．神をも超越していたら？』

突如、シュバルツから物凄い殺気が現れた。

『なっ．．．！』

ゼロ『に、逃げてくださいマスター！』

ゼロはそう叫んだが、宗一は．．．

『なあ、ゼロ．．．』

ゼロ『は、はい！？』

『．．．リヴェル．．．死んだのか？．．．』

俺は震える声を絞り出しながら言う。

ゼロ『おそらく．．．シュバルツの言っていることは正しい。彼は．  
．リヴェルは．．．死にました。』

『そつ、そつかあ．．．あ、アイツ死んだのか．．．ヒグツ．．．』

ゼロ『マスター．．．』

シュバルツ『どうした？そんなに悲しいか？あんなゴミ一つのために泣けるとは．．．馬鹿馬鹿しい！』

シュバルツはデバイスであろう大剣を振りかぶり俺に突っ込んできた。

ゼロ『ま、マスター！』

シュバルツ『フンっ、死ね．．．小僧！』

そして《ズバッ》と激しく切り裂かれる音が響いた。

（宗一 side out）

シュバルツ『グハツ．．．な、なにいつ!?!』

シュバルツは驚いていた。なぜなら．．．

宗一『．．．．．』

シュバルツ『なっ、なぜ私が斬られているっ!?!』

そう。斬りかかったシュバルツが逆に背中を斬られていたからだ。

宗一『ゼロ．．リミッター．．解除。』

ゼロ『わかりました。リミッターを3つ解除します。』

そして、宗一の身体が一瞬だけ光ると《グォーン》と周りの空気が変わる。

シュバルツ『なっ、なんだ！？なんなんだ、この魔力は！？』

宗一『アンタ．．リヴェルをゴミと言ったな．．ならアンタは．．クズだ。ゼロ．．モード1st．．タイプソード。』

ゼロ『Yes modest tipe sode』

そして宗一が握っていた杖の形が変わり一本ね剣が握られる。

宗一『．．シュバルツ・コーネル、貴様を．．消す』

こうして戦いは始まった。

く怒り、そして悲しみく（後書き）

さて勝負の行方はいかに？

次回はなんと．．．！

次回『く撃つもの、撃たれるもの』お楽しみに！

く撃つもの、撃たれるものく（前書き）

悲しき戦い、最悪の結末！

最悪の結末！？なんじゃろな？

それではどうぞ。

く撃つもの、撃たれるもの

二人の男が戦いを始める少し前、とある少女達が翠屋にいた。

なのは『それにしても、久しぶりの仕事だね!』

フェイト『うん、そうだね。でも今回はどんな仕事だろう?』

はやて『どんな仕事でもちやつちやとこなすんが私達やる?』

????『はやての言う通りだ!あたしらがやらないで誰がやんだよ!?!』

はやて『あはは、相変わらずやなヴィータ。』

ヴィータ『どんな敵だろうが叩き潰してやるよ!』

????『ヴィータ、落ち着け。耳が痛む。』

フェイト『シグナムとも久しぶりに仕事だね。』

シグナム『ああ、よろしく頼むテストロッサ。』

などと話していると・・・

????『みんな、聞こえるかい?』

一人の少年の声でした。

なのは『あつ！クロノくん、何か分かったの？』

クロノ『ああ、みんな聞いてくれ。そこから少し離れた森の中で魔力反応があった！．．．行けるかい？』

フェイト『反応は一つ？』

クロノ『いや、どうやら戦っているみたいだ。なんとかして止めてくれ。』

はやて『当たり前や！任せといて！』

ヴィータ『あたしらも行くぜ！』

シグナム『ああ。任された。』

クロノ『ありがとう。僕もすぐにむかうよ。それじゃ！』

クロノと呼ばれる少年はモニターから消えた。

フェイト『あれ？シャマルとザフィーラは？』

はやて『ああ、留守番やつ！今日の当番はあの二人なんよ。』

なのは『それじゃ、みんな行こう！』

そして皆走り出した。

彼女達には知る良しもなかった。森の中での戦闘、それがとても悲しく残酷であることを．．．。

その頃、森の中では……

《ガキいいーン》

剣と剣が激しくぶつかりあっていた。

宗一『シュバルツうー！！アンタだけはあー！！』

シュバルツ『ゲツ……何なんだこいつは！？』

宗一『アンタなんかがいるから！リヴェルはっ……リヴェルは死ぬはずじゃなかったのに！』

シュバルツ『チイっ……これでっ！』

シュバルツは剣に魔力を溜め込み振りかぶった。

ゼロ『マスター……どうします？』

宗一『ゼロ。俺もこれで終わらせる。』

宗一の持つ剣も金色に輝き出した。

そして！

シュバルツ『ブラッド……セイバー！！』

宗一『……龍牙一閃！！』

《ドガン》

街中に響いた。

くなのは達 side

《ドガン》

なのは「なっ、なんなの!？」

フェイト「す、凄い魔力!」

はやて「なんや?何が起こってるん?」

ヴィータ「おい、急ぐぞ!」

シグナム「そうだな・・・」

そしてまた走り出した。

くなのは達 side out

なのは達は現場に到着した。

あたりを見渡すと二人の男性が向かい合っていた。

なのは達はかれらに近づこうとした・・・が

宗一「答える!なぜリヴェルを傾した!？」

なのは達「えっ?」

シュバルツ『フッフフ．．．フハハハっ．．．なぜだ？そんなの決まってるだろ！憎かったのだよ。奴は俺が作るうとした世界を壊した！それが第一の理由だ。死ぬ必要があったんだよ！．．．あいつの死に顔最高だったぜ？フハハハっ．．．んぐっ！？』

宗一はシュバルツの胸倉を掴み首元に剣を突きつける．．．しかし

クロノ『時空管理局だ。武器を捨てるんだ！』

なのは達『クロノ（くん）』

しかし宗一はそんなことは無視して完全に首を切ろうとしている。

クロノ『捨てるんだ！でないて（ふざけるなっ！！）．．．えっ？』

クロノだけではなくなのは達も驚いた。

宗一『武器を捨てる？ふざけるなよ．．．ヒグッ．．．こいつは、こいつは俺の友を殺したんだ！会ってまだ間もないけど．．．とてもいい奴だったんだ。なのに、こいつはそいつをゴミ扱いしやがった！．．．やっど．．．追い詰めたんだ．．．ヒグッ．．．ここまできたんだよ！頼むから邪魔しないでくれ！！』

クロノ『だがしかし．．．ここで君がそいつを殺せばっ（わかってる！！）』

宗一『俺がこいつを殺せば．．．確実に俺も罪に問われる。そんなこと分かってるんだ。』

クロノ『ならば尚更っ（じゃあどうすればいいんだっ！！）』

宗一『どうすれば．．．どうすればあ．．．ヒグッ!』

宗一の目からは涙が溢れていた．．．しかし

《ザシュ》

その場の誰もが言葉を失った

宗一『うっ．．．ぐはあっ!』

宗一は胸を貫かれた。

口から大量の吐血

シュバルツ『フハハハっ!油断しおって。私が貴様ごときに倒されるわけないであろう．．．』

宗一『そんな．．．まさかっ．．．ブハッ!』

シュバルツ『すまないが、今回は引かせてもらう．．．』

宗一『ま、待て．．．』

そしてシュバルツは消えていき．．．

クロノ『だっ、大丈夫か!?しっかりしろ!』

宗一『お、お前か．．．すまない。あの時、お前に引き渡せば．．．  
うっ!』

クロノ『そんなこと、今はどうでもいいっ!』

力尽き、宗一のバリアジャケットが解除される。

な・フ・は『えっ……!?!?』

少女達は目を疑った……なぜなら……

クロノ『みんなもはやくっ!……なのは?フェイト?はやて?』

胸を貫かれ倒れている少年が……

なのは『う、嘘っ!い、いやあ!』

フェイト『あ、ああ……』

はやて『どないしよう、どないしたらっ!』

三人の前に血だらけで倒れているは……昏間の彼だったのだから。

く撃つもの、撃たれるものく（後書き）

まさかの主人公死す!?

早くね？

次回『く俺はく』お楽しみに！

〜俺は〜（前書き）

はあ、文化祭準備忙しい。

今回も宗一泣く!？

それではどうしよ。

く俺はく

そこはとある病室。

宗一『んっ．．．ここは？．．．知らない天井。』

すると．．．

ゼロ『ここは病室です。次元航空艦アースラの艦内の病室です。』

宗一『次元航空？謎だな．．．人が一次元の点とかになれるのかな？』

ゼロ『．．．馬鹿ですか？』

宗一『へっ？馬鹿？俺がか？』

ゼロ『あなた以外に考えられませんよ。』

宗一『まあまあ、気にならない気にしない！』

ゼロ『．．．はあ。』

????『あらっ、目が覚めたみたいね。』

聞き覚えのない女性の声。

宗一『．．．あなたは？』

???? 『私はシャマルといひます。アースラで働いてます!』

宗一 『そっか、看病ありがとう。．．．ニコッ（あっ／＼／＼／＼）』

シャマルは宗一の笑顔の餌食にされた。

宗一 『あの、顔あかいですよ？風邪ですか？』

シャマル 『い、いえ!だ、大丈夫ですから!（はあ、カワイイ笑顔／＼／＼／＼）』

シャマルは宗一に夢中。

シャマル 『それにしても、貴方は不思議です。運び込まれてきた時は、胸を貫かれていたのに。．．．。』

先ほどまで宗一に夢中だったシャマルだが、我に返り話し始めた。

宗一 『。．．。』

俯き黙り込む宗一。

シャマル 『あ、あのお。．．。』

宗一 『。．．。それは。．．。た。』

シャマル 『え?』

宗一 『お、俺は。．．。勝てなかった。．．。』

シヤマル『あ、あんな状態で勝つなんて無理ですっ!』

シヤマルは思わず宗一の目の前まで乗り出していった。

宗一『友が殺されたんだ．．．死ぬはずじゃなかったのにつ．．．ヒグツ．．．会ってからまだ一日二日しかたたないのにつ、なんだか家族みたいに話すようになって．．．ヒグツ．．．なのにつ!あいつが．．．あいつが殺したんだっ!俺の大切な友を．．．殺したんだよ!俺がもっと強かったら仇が打てた．．．打たなきゃいけないのにつ、俺が弱いからっ!』

《ワサツ》

宗一『っ!?!』

宗一は驚いた。

シヤマル『貴方はっ、貴方は弱くなんかないわ．．．』

優しく抱かれていたから．．．。

宗一『．．．。』

シヤマル『貴方は決して弱くなんかない。大丈夫ですよっ、私が保証します。貴方は友のために大きな壁に立ち向かった。あんなに大怪我をしながらも．．．。それだけで十分強いですよ。勝つためには、強さだけが必要なわけじゃない．．．。時には負けちゃうこともありますよ。時間をかけて、じっくりと強くなればいいです。今からでも遅くはないですから。』

シャマルは語る。

宗一『・・・あっ、うああああ〜!!!』

宗一はシャマルの胸の中で泣くのだった。

シャマル『それじゃ、私わいきますね!』

宗一『あ、ああ・・・すまない。』

シャマル『いえいえ・・・。』

宗一『・・・ありがとう。』

再び宗一はシャマルに優しく微笑んだ。

シャマル『・・・っ!／／／／／』(その笑顔はやめてください・・・  
／／／／)

シャマルは宗一の笑顔に弱い。さすが宗一である。

宗一『そりゃどうせ。』

シャマル『あの、誰に話してるんですか?』

宗一『いや、なんでもない。』

シャマル『そうですか、では・・・。』

宗一『ああ。』

そしてシャマルという女性は部屋から出て行った。

ゼロ『マスター、一つよろしいでしょうか？』

宗一『なんだい？』

再びゼロが話しかけてくる。

ゼロ『はい、先ほどの戦いでマスターは胸を貫かれました。．．．  
回復が早すぎます。』

宗一『それは俺もわからないな。まあ、リヴェルがしたんじゃないかね？』

ゼロ『そ、そうですか．．．。』

宗一『んじゃ、俺もう一度寝るよ。おやすみ。』

ゼロ『はい。おやすみなさい、マスター。』

宗一は眠りについた。

〜俺は〜（後書き）

文化祭準備頑張ります。

次回『〜復活〜』お楽しみに！

〜復活〜(前書き)

アイツ再び!?

宗一復活!?

それではどうぞ。

〜復活〜

（宗一 side）

俺は広い草原にいた。

周りには誰もいない、自分しか存在しない。

『ここは・・・どこだ？』

俺は考えながらゆっくりと歩く。

????『ここは君の夢の中だよ【高峰 宗一】。』

すると突然、誰もいないはずの世界に男性の声が響いた。

『だっ、誰だ!?!』

俺は足を止め、周りを慌てながら見回す。

????『ああ、すまない。姿が見えないのか・・・私は・・・。』

俺は驚き目を見開いた。

????『・・・リヴェルだ。』

『っ!?!』

声の主は、死んでしまったと思っていた・・・大切な友だったのである。

（宗一 side out）

宗一 『．．．んっ。』

宗一 は目を覚めます。

宗一 『．．．ゼロ．．．。』

ゼロ 『はい、なんでしょう？』

宗一 『俺はどの位寝ていた？』

ゼロ 『．．．かれこれ5時間くらいかと。』

宗一 『そうか．．．。』

ゼロ 『マスター？』

宗一 『なあ、ゼロ．．．。』

ゼロ 『はい？』

宗一 『．．．。』

ゼロ 『あっ、あのお．．．。』

宗一 『リヴェルが．．．生きてる．．．。』

ゼロ 『．．．っ！？ほっ、本当ですか？』

宗一『ああ、さっき夢で話してたよ。チカラが足りないから姿を表せないらしい。』

ゼロ『し、しかし．．．あの男が襲ってくる時以前には既に．．．  
っ！！』

ゼロは驚きを隠せずにいたが、やがて気づく。

ゼロ『げ、幻影術．．．。』

宗一『そうだ。おそらくは幻影術を使って死を回避した。』

ゼロ『で、ですが．．．シュバルツほどの人間になるとすぐに気付くはずでは？』

宗一『一時的にすべてのチカラを幻影術に込めれば．．．。』

ゼロは少し納得した様子。

宗一『シュバルツは所詮神以下だ。超越などしていない．．．次こそは．．．俺が必ず！！』

宗一はそう決意したのである。

（なのは達side）

私達は三人で廊下を歩いていました。

なのは『．．．．．。』

フエイト『…な、なのは？あの人なら大丈夫！シャマルがきつと助けてくれてるよ。』

はやて『そや！うちのシャマルに任せれば大丈夫やよ。』

そう言いながら歩いていると…

《ピーピー…》

なのは『アラート!?!』

フエイト『あ、あの人した後だね。』

はやて『今はとりあえず行くで!』

少女達は走り出した。

そして少年は…。

〈宗—side〉

『なんだ!?!』

ゼロ『緊急アラートです!』

『この感じ…』

ゼロ『はい、【シユバルツ】です!』

『行くぞ!』

ゼロ『無理ですっ！今のマスターは（それでも！）．．．。』

『アイツは強いんだ！俺が一番わかってる！．．．今行かないと．．．他の人たちは？このアースラの人たちはどうなる！？．．．頼むよゼロ、俺は．．．世界を救う！』

俺は言い放った。

ゼロ『わかりました。行きましょう！』

『ありがとう．．．ゼロ、セットアップ！』

ゼロ『Yes, standby ready』

俺は光に包まれた。

（宗一 side out）

宗一『行くぞ、転移！』

彼は足下に白い魔方陣を形成し、転移していった。

く復活く (後書き)

さあ次回は戦闘！

次回『く偽りの正義』 お楽しみに！

く偽りの正義く（前書き）

戦闘長くなるかも・・・

明日はいよいよ文化祭！

それではどしどし。

## く偽りの正義

そこは時空管理外世界「ラゴス」。

なのは「じ、ここは？」

クロノ「分からない。でも．．．酷いな。」

アラートを聞いて至急現地に向かったなのは達は驚きのあまり声が出せなかった。

フェイト「そんなっ！？こっ、ここの住民は．．．どっ？」

はやて「避難したんやないか？」

シグナム「主、避難したとは．．．考えられません。」

はやて「そっ、そんなことない！探せばきっと．．．。」

ヴィータ「はやて．．．。」

そこは一面火の海であった。

クロノ「一体誰が．．．（私ですよ。）っ！？」

クロノは咄嗟に身を引いた。

「????」ほう、今のをかわすか．．．フッ、なかなかやるな。」

そいつは黒いマントをしてフードをかぶっていた。

クロノ『だ、だれだ!?!』

クロノは震えていた。

クロノだけではない。他のみんなもである。

なぜか．．．怖いからだ。黒いマントの中からは凄まじい程の殺気が溢れているのである。

????『フツ、怖いか?』

クロノ『なっ!?!』

(早く逃げないと．．．)

クロノはそう思った。しかし．．．

《ズバツ》

クロノ『．．．ぐはっ!』

一同『くっ、クロノ(君)!』

クロノは肩を切り裂かれていた．．．

クロノ『ぐっ．．．な、なぜだ．．．?み、見えなかった!?!』

クロノは何が起きたのか分からずにいた。

????『私が誰か?．．．いいだろう。私は【シュバルツ・コーネル】だ。』

そういつてマントを脱ぐ。そこには一人の男性。

クロノ『なっ!?!お前は!』

クロノは知っていた。そいつはあの時海鳴で一人の少年の胸を貫いた男だからだ。

シュバルツ『フンツ、久しいな少年。』

なのは『クロノ君、知ってるの?』

クロノ『ああ、奴は・・・今アースラの病室にいる少年の胸を貫いた男だ!』

一同『なっ!?!?』

なのは『あつ、貴方が・・・』

フェイト『あの人の・・・』

二人の少女はデバイスを構える。

はやて『ふ、二人とも!ダメや!わかるやろ?あの魔力・・・うちらじゃどうにもならん!』

フェイト『で、でも!』

はやて『まずは落ちつかんとあかんよ。』

フェイト『わ、わかった．．．なのは？』

はやての言葉にフェイトは足を止た。しかし．．．

なのは『貴方があの人を．．．どうして！』

なのはは聞かずに突っ込んだ。

一同『な、なのは（高町）！？』

なのは『はあゝー！』

シュバルツ『小娘一人か、笑わせるな！』

《ヒュン．．．ドスツ》

なのは『．．．ぐあっ！』

なのはは腹に蹴りを食らう。

なのは『なんでっ！』

シュバルツ『あははははっ！管理局とはこんなにも雑魚のかたまりなのか？．．．まあいい。お前たちはここで死ぬのだからな！』

シュバルツはなのはにデバイスを向ける。

シュバルツ『．．．エイリス．．．』

エイリス『．．．お呼びですか？』

シュバルツ『こいつらを排除する。モード2nd・・・モードガトリング。』

エイリス『Yes, my master』

シュバルツの持つ剣がガトリング型に変わりなのはをロックオンした。

フェイト『逃げてっ、なのは!』

はやて『なのはちゃん!』

クロノ『なのは!』

ヴィータ『おい、シグナム!』

シグナム『ちっ、無理だ!間に合わん。』

なのは『(ダメだ、私・・・死ぬの?)』

そして・・・

シュバルツ『死ねええ〜!』

《ビュンっ・・・ドガン》

シュバルツのガトリングからの一撃が放たれた。

フェイト『なっ、なのはあ〜!〜!』

クロノ『くそっ!』

はやて『そんなっ!?!』

シグナム『チッ!』

ヴィータ『なのはあ!』

皆が叫んだ．．．しかし．．．

シュバルツ『何故だ!なぜお前が居るんだ!?!』

一同『えっ?』

シュバルツの突然の言葉に皆は顔を上げた。

???『シュバルツ・コーネル．．．アンタを殺す。』

シュバルツ『高峰 宗一!?!』

くなのはside)

『あれ?痛くない?なんで．．．』

私はガトリングで撃たれたのに痛みがありません。なぜかと思っ  
ていると．．．

シュバルツ『何故だ!なぜお前が居るんだ!?!』

『えっ?』

なぜか私を撃った男の人が驚いています。私は目を開きました。すると……、

???? 『シュバルツ・コーネル……アンタを殺す。』

もう一人、男性が私の前に立っていました。

シュバルツ 『高峰 宗一!!』

（なのはside out）

シュバルツ 『高峰宗一!!』

撃たれたはずなのはの前に立っていたのは、自分が胸を貫いた少年だからだ。

シュバルツ 『なぜ生きている!?!』

宗一 『勝手に殺すなよ。アンタを始末するまで死ぬ気はねえーよ!』

シュバルツ 『くっ……。』

シュバルツは下唇を噛んだ。

なのは 『あつ、あのお……。』

宗一 『ん? ああ、すまない。立てるか?』

宗一はなのはの手を掴み立たせた。

なのは『あ、すみません．．．／／／／』

宗一『まずはみんなと合流だな。』

そう言つて、他のみんなのところに飛んだ。

クロノ『き、君は！胸を貫かれて．．．。』

宗一『ん？ああ、あの時の．．．すまなかつたな、助けてもらつて感謝している。』

クロノ『あ、ああ．．．つて！今はそんなこと聞いていない！あんなに大怪我をしたのに、一日で回復するなんて早すぎる！』

宗一『それゼロにも言われたな。』

クロノ『ゼロ？』

宗一『俺のデバイスだ。』

宗一は真つ黒な杖を前にかざしクロノに見せた。

ゼロ『私はゼロです。よろしくお願いします。』

クロノ『よろしく。しかし君は（逃げろ！）つて．．．え？』

宗一『聞こえないのか？お前達は早くアースラに帰還しろ！ここはもう直ぐ崩れ始める！逃げ遅れるまえに．．．早く！』

宗一は叫んだ。

クロノ『君はどうするんだ？』

宗一『俺はアイツを始末する。』

宗一は軽々しく言い放つ。

『．．．だよつ。』

宗一『えっ？』

『そんなのダメだよ！』

宗一『おわっ！？』

宗一はいきなり少女達に詰め寄られた。

宗一『君たちは！？あの喫茶店でっ．．．』

なのは『一人で残るなんて！』

フェイト『そうだよっ．．．危ない。』

はやて『そうや！みんなで力合わせればかてる！』

しかし．．．

《ジュイン》

なのは『ば、バインド!?!』

フェイト『なんでっ!?!』

はやて『貴方がやったんか?』

少女達はバインドで手足を拘束された。

宗一『すまない．．．許せ。』

そして少女達ね下に白い魔方陣。

なのは『どうして!?!』

フェイト『くっ．．．。』

はやて『動けへん!』

宗一『．．．転送!』

そして少女達は光に包まれた。

宗一『お前らも早く帰還しろ!』

ヴィータ『おまえ!?!どういうっ(わかった)．．．シグナム!?!』

シグナム『何を言っても無駄だ。そういう目だ。』

宗一『おっ、話がわかる人で助かります。』

シグナム『．．．最後に．．．名前を聞かせてもらおうか。』

宗一『．．．高峰．．．宗一。』

シグナム『宗一か、その名前わすれない!』

宗一『なんか、俺死ぬ前提みたいですが?』

シグナム『死なないのか?』

宗一『真顔ですらつと酷いこといいますね。』

宗一は少しシヨック。

シグナム『まあ．．．死ぬなよ。』

宗一『わかってますよ。』

ヴィータ『．．．。』

宗一『ん?どうした?』

宗一は黙り込んでいるヴィータに覗き込みながら尋ねる。

ヴィータ『その．．．死ぬなよ?』

宗一『なんだ?心配してくれるのか?』

ヴィータ『しつ、心配なんかっ《ボフツ》え?』

ヴィータの頭に手が軽く乗る。

宗一『ありがとう。』

宗一はヴィータを撫でた。

ヴィータ『お、おうっ／＼／＼／』

そして二人も帰還した。

残りは。』

クロノ『。』

宗一『なんだ？浮かない顔して。』

クロノ『大丈夫なのか？』

クロノが心配そうにこちらを見た。

宗一『なんのために俺が全員帰らせたか分かるか？』

クロノ『えっ？』

クロノは戸惑う。

宗一『俺が力を開放したら、みんなを巻き込むかもしれないから。だからだ。』

クロノ『そうか。』。なら約束だ。』

宗一『約束？』

クロノ『これがおわつたらアースラに帰ってこい！いいな？』

宗一『はあ、わかったよ。んじやな。』

クロノはまだ完全に納得していないが仕方なくその場を後にした。

宗一『．．．待たせたな！』

シュバルツ『ああ、待たされた。』

宗一『なあ、なぜ人を殺す？なぜ街を焼くんだよ。』

シュバルツ『決まっている！私の生きる世界に私以外必要ないんだ！だから殺す！そしてその世界にまず邪魔になったのがリヴェルだ！』

宗一『なあ、リヴェルは生きてるぞ？』

シュバルツ『んなつ！？』

シュバルツは目を見開く。

シュバルツ『う、嘘だ！奴は私が完全に始末した。そんなことはっ  
(幻影術)っ！？』

宗一の言葉でやっと理解したシュバルツ。

シュバルツ『そうか．．．ならっ！！』

宗一『っ!?!?』

《ガキン》

シュバルツは一瞬にして間合いを縮め、宗一に斬りかかった!

宗一『何のつもりだ?』

シュバルツ『．．．貴様を殺す．．．。』

宗一『お前は人を殺し続けて何も感じないのかよ!?!?』

シュバルツ『感じないな．．．私は五年前に戦争で家族を失った。

それからだ! 人間という存在を愚かだと感じたのは．．．家族のためにも、死ぬということをも全人類に教えなくては気がすまないんだよ、私はっ!?!?』

宗一『アンタも、その人間だ! 今のままでは．．．家族を殺した奴らと何も変わらないぞ!』

シュバルツ『くっ!?!?．．．うるさい!?!?』

剣と剣が激しくぶつかり合う音と共に、二人の男の声が響いた。

宗一『はあはあ．．．それがアンタの正義か．．．?』

シュバルツ『そうだ、何度言わせる．．．。』

(一回だ)などとツッコんだら負けだ。

宗一『そうかい。ならその正義は・・・偽りだ!!!』

宗一は鋭い目つきでシュバルツを睨みながら叫ぶのだった。

く偽りの正義く（後書き）

やっぱり始めて小説書くとダメダメですね。

次回『く家族く』お楽しみに！

〜家族〜（前書き）

ついに決着。

え？長くなるとか言って短いじゃん？

返す言葉がありません。すみません！

それではごうそ。

〜家族〜

宗一とシュバルツが戦っている頃、なのは達はアースラに帰還していた。戦闘の状況をブリッジのモニターで見っていた。

なのは『・・・大丈夫かな？』

フェイト『・・・うん。』

クロノ『大丈夫さ、彼なら・・・。』

???『へエ、クロノがそこまで言うなんてね。』

一人の女性がクロノに声をかける。

クロノ『か、母さっ・・・艦長・・・。』

なのは『リッ、リンディさん!』

フェイト『母さん・・・。』

はやて『リンディさん、いつからいたん?』

リンディ『今!』

クロノ『はあ・・・。』

???『お、い!私を忘れてもらっちゃ困るよ!』

クロノ『艦長、彼は（無視！？）．．．エイミィ．．．。』

エイミィ『クロノくん、元気がないなあ．．．そんなに彼が気になるの？』

クロノ『だから、それを今から話そうとしてたんだよ！』

リンディ『はいはい、二人とも！今は戦闘を見守りましょう。』

ク・エ『了解。』

二人は直ぐにモニターに目を戻した。

所変わってラゴス。

二人はいまだに激しい戦闘を繰り返している。

宗一『龍牙一閃！！』

シュバルツ『ぐっ、ブラッドセイバー！！』

たちまち大きな爆発が起きる。

宗一『まだわからないのか？こんなことしても何も変わらない！残るのは孤独だけだ！！』

シュバルツ『孤独で何が悪い？孤独は望ましいこと．．．死んだ家族もみな孤独だ！俺は常に家族と共にあった。それなのに！』

宗一『今のアンタをみたら．．．家族は泣くぞ。孤独なアンタなんか見たくないはずだ。』

シュバルツ『貴様に何がわかるんだ！？家族を失うことの辛さを貴様は分かるか！？．．．分からないだろ！』

シュバルツは叫ぶのが、宗一の顔には悲しさが溢れていた。

宗一『わかるさっ！！』

シュバルツ『なっ！？』

宗一の返答に啞然としてしまうシュバルツ。

宗一『俺は三歳の時に家族をなくした．．．あの暖かさを失った．．．』

シュバルツ『．．．』

シュバルツは脱力した。

宗一『それからだ！俺はたくさんの人たちに幸せを与えなくなった！十年間．．．寂しかったさっ．．．ヒグツ．．．泣きたかったさ！でも、泣いてる顔なんか誰にも見せないと誓った！母さんも、父さんも．．．ヒグツ．．．兄さんも、俺の泣いてる顔見たら困っちゃうんだろっなって思っただけ．．．もういないんだよ！シュバルツ．．．現実を受け入れろよ。』

シュバルツ『現実だ？笑わせてくれる。』

宗一『なにっ？』

シュバルツ『無理なんだよ！もつておくれなんだっ！．．．一度血で手を染めてしまえば、引き返せない！わかってたさ。間違ってるのも．．．ヒグツ．．．でも、どうしようも無いじゃないか！』

シュバルツは泣いていた。

宗一『シュバルツ．．．。』

シュバルツ『だから私は最後まで成し遂げる！自分の使命を！』

そういつてシュバルツは宗一に突っ込む。

宗一『ゼロ．．．。』

ゼロ『Yes, mode release』

宗一『リミッター全解除！！』

ゼロ『all release』

宗一はゼロを杖の形に戻し、天にかざし魔力を溜める。

宗一『シュバルツ．．．すまない。』

宗一は小さく呟き．．．

宗一『デス．．．ブレイカー！！』

《シュバーン》

シュバルツ『んなつ!?!なんだと!?!うっ、うわああ』

シュバルツは漆黒の光に包まれた。

くなのは達 side)

エイミイ『えっ．．．嘘!?!』

リンディ『どうしたの?』

エイミイ『高峰くんの魔力．．．測定不能ですっ、きゃあ!?!』

魔力測定機が破壊された。

リンディ『そ、そんな．．．。』

クロノ『やはり．．．。』

なのは『えっ?クロノくん、やはりって?』

フェイト『何か知ってるの?お兄ちゃん。』

はやて『隠さず言っつてや!』

リンディ『クロノ。』

クロノ『は、はい。実は(デス．．．ブレイカー!!)なっ!?!』

《シュバーン》

一同『な、なに？（なんや？）』

画面は真っ暗になり、凄まじい音が響いた。  
そして次第に暗かった画面が晴れて行き……。

『うつ……ヒグツ……ヒグツ……うあああ！！』

聞こえてきたのは一人の少年の泣き声だった。

（なのは達 side out）

宗一『うつ……ヒグツ……ヒグツ……うわあああ！！』

宗一は一人の男性を抱き抱えながら泣いていた。

宗一『何故だっ！なぜ……ヒグツ……。』

ゼロ『マスター……マスターは正しかった。誤った道をゆくシュバルツは恐らくマスターのおかげで変われたでしょう。あのまま誤った道をゆけば……もっと酷くなっていました！』

宗一『わかってるさ。ただ……もう少しだけ時間が欲しかったな。……なあ、ゼロ。シュバルツは家族に会えるかな？』

ゼロ『はい。マスターのおかげです。シュバルツは家族の暖かさをとりもどしたでしょう。』

宗一『そうか……よかった。』

宗一は肩の力を抜く。しかし……

《ズガガガツ．．．ドゴーン》  
ラゴスが崩れはじめる。

ゼロ『ま、マスター!!』

宗一『ああ、わかってるさ!』

そして宗一はラゴスを一度見ながら．．．

宗一『おやすみ．．．』

そういつて転移していった。

宗一『家族．．．か。』

そして向かうは．．．

クロノ『しゅ、宗一!!』

宗一『ああ．．．お前か。』

クロノ『大丈夫なのか?』

宗一『大丈夫だ。少し疲れただけだ。身体も．．．心も。』

クロノ『宗一．．．』

宗一は俯き、クロノは宗一を見て顔を顰める。

リンディ『高峰 宗一君。私はここ、アースラの艦長をやってるわ。』

よろしくね!』

エイミー『艦長、お茶です。』

リンディ『ありがとうエイミー。』

お茶をもらったリンディはスプーンを手に取り・・・ミルクと角砂糖を入れて混ぜた。

宗一『。。。』

ゼロ『マスター・・・気にしたら負けです。』

宗一『だよな。。。』

なのは『あのっ!』

宗一『ん?』

フェイト『だ、大丈夫ですか?』

宗一『ああ、大丈夫だ。ありがとう(ニコッ)(』

フェイト『はううつ・・・////』

はやて『ほんまに?』

宗一『大丈夫だ。心配するなよ。』

宗一ははやての頭に手を乗せて通り過ぎようとした。

《ドサッ》

一同『えっ?』

クロノ『宗一!』

なのは『大丈夫ですか?』

フエイト『しつかり。』

はやて『大丈夫言っただやんか!』

リンディ『エイミィ、至急医療班を!』

エイミィ『は、はい!』

リンディ『大丈夫よ、すぐに医療班が着くわ!』

リンディは宗一を抱いている。

宗一『...母...さん。』

宗一はリンディの耳元で小さく呟いた。

リンディ『...こんなに小さいのに...大丈夫よ。ゆっくり休みなさい。』

そして宗一は眠ったのだった。

〜家族〜（後書き）

なんか、シュバルツはいい奴じゃない？

これからも敵さんまだまだ出ますよ！

次回『〜温もり〜』お楽しみに！

く温もりく（前書き）

まさかの展開！？

感じる温もり。

それではどうぞ。

く温もり

宗一は寝ていた。静かな一室で。

宗一『．．．。』

あれから三日、いまだに目を覚まさない。

なのは『目．．．覚まさないね。』

フェイト『うん．．．。』

はやて『もう三日たつとんに．．．。』

三人の少女達はアースラの医療室のベッドで静かに眠り続けている  
宗一の側で話していた。

なのは『私が．．．私があの時直ぐにでも現場に向かえばよかった  
んだ．．．。』

フェイト『な、なのはのせいなんかじゃないよ!!--』

なのは『フェイトちゃん．．．。』

はやて『そや、そんななら私もや．．．。』

三人が悲しく会話をしていた．．．そこへ。

クロノ『君たちは何も悪くはない。』

クロノが入ってきた。

なのは『クロノくん……。』

フェイト『お兄ちゃん……。』

はやて『悪くないって……。』

少女達はクロノを見た。

クロノ『彼はなぜ僕たちをあの場合から逃がしたか分かるかい？』

クロノは問う。

なのは『それは……私たちが邪魔だから……？』

フェイト『……うん。』

はやて『それ以外に思いつかんし。』

クロノ『はあ、君たちは彼がそんな人間に見えるのかい？』

クロノは少し呆れながらも言う。

なのは『そんなことない！』

フェイト『なのは……。』

なのは『だって……翠屋であった時、』

凄く優しくしてくれたし．．．。』

はやて『なのはちゃん。』

クロノ『それに、彼が最後に使った魔法．．．あの場にいれば僕たちまで巻き込まれていた。彼は僕たちを守ってくれたんだよ。』

クロノの顔はとても真剣であった。

宗一『んっ．．．。』

な・フ・は・ク『宗<sup>くん</sup>一!!』

宗一『ん？お前達は（ドサツ）えっ？』

なのは『心配．．．したんだよ!?ヒグッ．．．。』

なのはは宗一に勢いよく抱きついていていた。宗一は少し驚いていた。

宗一『す、すまない。でも（ぎゅっ）．．．。』

フェイト『あ、あの．．．フェイト、フェイト・テストロッサです。』

はやて『うちは八神はやて言います。』

宗一『ああ、よろしく。それと．．．ありがとうございます。（ニッコウ）』

フ・は『はづうう／／／／／』

二人は撃沈させられた。

宗一『それに君（なのは！！）も・・・？』

なのは『わたしはなのは！！高町なのは！！』

宗一『ありがとうなのは？（ニコッ）』

なのは『はううう／＼／＼／』

なのは撃沈！

クロノ『はあ・・・君は・・・。』

クロノは完全に呆れている。

宗一『お前にも感謝している。』

クロノ『あ、いや僕はなにもしていないよ。』

宗一『それでもだ。』

クロノ『そうかい。どういたしまして。』

笑い合う二人だが・・・（クロノ、彼の調子は？）女性が入ってきた、しかも二人だ！

リンディ『あら？おきたのね！？』

宗一『はい、今さっき・・・。』

エイミィ『大丈夫？』

宗一『はい！全てあなた達のおかげです、ありがとうございます。』

リンディィ『ふふっ．．．運び込まれた時は大変だったのよ？それに、抱いたら母さんってつぶやくし。』

宗一『へ？』

リンディィ『覚えてないかしら？』

宗一『えつと、その．．．すみません。／／／／／』

宗一は少し頬を赤らめながら俯く。

リンディィ『えっ！？／／／いや、いいのよ別にっ！』

あわてて言うリンディィ、そして．．．。

エイミィ『かつ、可愛い．．．（バタッ）』

倒れるエイミィであった。

リンディィ『それじゃあ怪我が治ったらまたゆっくり話しましょう。』

宗一『いえ、俺は怪我が治り次第ここを出ますよ。』

リンディィの言葉を聞き、反論するかのように言う宗一。

リンディ『何故かしら?』

宗一『俺は旅をしている。この世界の全てを知りたい。しかしながらあまり時間に余裕がないんだ。すまないが、ここに世話になるつもりはない。』

クロノ『宗一．．．。』

クロノは悲しげな顔になる。

宗一『どうした? 浮かない顔して。』

クロノ『死ぬなよ?』

宗一『は?』

宗一は思わず間拔けな声を出す。

クロノ『この世界は危険が多い! 君のような子供が一人で．．．。』

宗一『はあ、わあつたよ! 約束だ。いつか必ず会おうな!』

クロノ『あ、ああ! 約束だ。』

二人の少年は硬い絆で結ばれた。

リンディ『ふふっ。』

リンディは暖かい目で二人を見つめていた。

宗一『さてと、んじゃもうひと休みする(ワサッ)・・・か?』

宗一は分からなかった。

リンディ『まったく、危なっかしい子ね。本当に・・・。』

リンディに優しく抱かれていることに。

宗一『あ、あの・・・。』

リンディ『いくな、とは言わないわ。ただ・・・ちゃんと帰ってきてなさい! いいわね?』

宗一『・・・はいつ!?!』

リンディ『よろしい。それじゃあオマジナイ!』

宗一『オマジナイ? まだ怪我が治るまで行きませ(チュッ)ん・・・よ。』

宗一は頬に口づけされた。

クロノ『か、母さん!?!』

クロノは動揺している。

リンディ『これであなたは大丈夫!』

宗一『ありがとう・・・じぎいますノノノノ』

リンディ『それじゃあね!』

宗一『はい。』

クロノ『とにかく今は身体を休めるんだ。』

宗一『ああ、いろいろありがとう。』

そして二人は倒れている四人を連れて出ていった。

宗一『ふう〜、ゼロいるか?』

ゼロ『はい、なんでしょう?』

宗一『俺が寝ている間にリカバリーかけておいてくれ。』

ゼロ『わかりました。』

宗一『おやすみ。』

ゼロ『はい、おやすみなさい、マスター。』

そして宗一は頬に手を当てながら・・・

宗一『俺は死ねないんだな。』

そついいながら目を閉じたのだ。

宗一は心に微かな温もりを感じていた。

く温もりく（後書き）

本当まさかの展開だ。

次回『く過去く』お楽しみに！

く過去く(前書き)

宗一の過去!?

来週、ついに俺はテストと戦う。

それではどうぞ。

く過去く

宗一は一人歩いていた。

宗一『ふわあ〜．．．よく寝たな。』

ゼロ『元気ですねマスター。』

宗一『そりゃ、元気が一番だろ?』

ゼロ『それはそうですが．．．はあ。』

ゼロは昨日まで怪我で寝ていたのとは思えない宗一の姿にため息が出てしまう。

宗一『ここ出たらどこ行くの?』

ゼロ『そうですね．．．どうしましょうか。』

そんな話をしていると．．．。

なのは『あつ、宗一君!』

フェイト『あ、本当だ!』

はやて『ほんま!?!おーい!』

少女達は叫ぶ。

宗一『あはは、声が大きいよ。』

宗一は苦笑いしながら少女達に近づく。

なのは『宗一君も一緒にご飯食べよ!!--』

宗一『ああ、そうだな。それじゃあ食べようか。』

宗一はそういってご飯を取りに行く。

宗一『ただいま。』

宗一が笑顔で帰ってきた。

フェイト『あ、おかえり!』

フェイトは笑顔で返してきたが...

なのは『えっ、そのお...////』

はやて『おっ、おかえり...////』

二人はなんだか落ち着かない様子。

フェイト『どうしたの?二人とも。』

フェイトは疑問に思う。

なのは『だ、だって...////』

はやて『うん／＼／／』

フェイト『??』

フェイトは気づかない。

宗一『ああ、そうか．．．ごめん!』

頭を掻きながら謝る宗一。

なのは『ううん、べつに嫌とかじゃないから．．．。』

はやて『そうや、謝らんといて．．．。』

フェイト『ねえ、なんなの?』

フェイトが頬を膨らませている。

なのは『ほら、宗一君がただいまって言ったときに、なんだか夫婦  
みたいだなんて．．．／＼／／／』

はやて『そうなんよ．．．／＼／／／』

フェイト『ああっ!!／＼／／／』

ようやく気づいたフェイトだった。

それからしばらく、四人は話していた。

なのは『はあ、なんだか平和だな。』

宗一『オヤジくさいな．．．』

フェイト『なのはは臭くないよ!』

はやて『いや、違うんよフェイトちゃん．．．』

なのは『宗一君は知らないんだけど、私たち今までいろいろ辛いこととかたくさんあったんだ．．．』

いきなり話し始めたなのは。他の二人も少し表情が暗くなる。

宗一『辛いこと?』

なのは『うん。私はね、ついこの間まで怪我でうごけなかったの。一時期は魔導師続けられるか分からなかったんだ．．．』

宗一『えっ!?!?』

なのは『でも、フェイトちゃんはやてちゃん。アースラのみんなとまだ仕事したかったから．．．頑張れた。』

宗一は真剣に聞いていた。

フェイト『私はね．．．前はなのはの敵だったんだ。』

宗一『敵!?!?』

フェイト『あるロストロギアがきっかけでね．．．。それで母さんを．．．失った。』

宗一『母さん．．．。』

フェイト『でも、なのは達がいたから．．．立ち直れた。今もかうして頑張ってる。』

宗一『そっか．．．。』

はやて『私も、ロストロギアが原因でたくさんの人々をかなしませてもうた。本当はこんなに幸せな日々は送れてなかったけど．．．なのはちゃんやフェイトちゃん達がいたから。』

宗一の悲しげな表情が続く。

なのは『う、ごめんね！いきなりこんな話．．．。』

はやて『そや、だからそんな悲しい顔せんでええよ。』

慌てて場の空気を変えようとする二人。しかし．．．。

フェイト『ねえ、宗一は今まで辛いことあったりした？』

フェイトは違った。

宗一『．．．。』

なのは『宗一君？』

宗一『俺は家族を失った。』

な・フ・は『えっ!?!?』

三人は目を見開く。

なのは『か、家族．．．。』

フェイト『．．．。』

はやて『どうして?』

宗一『昔、俺が三歳の時に事故でね．．．。』

なのは『それから．．．引き取られたりしたの?』

なのはは宗一に詰め寄る。

宗一『いや、それからはずっとひとりだったよ。』

またしても少女達は目を見開く。

なのは『．．．ヒグツ．．．。』

宗一『おい、泣くなよ。二人も．．．はあ。』

フェイト『．．．。』

はやて『．．．。』

なのはは思わず涙を流す。他の二人は涙を堪えながら黙り込む。

宗一『でも、今は一人じゃない。』

な・フ・は『えっ?』

少女達はそろって宗一を見る。

宗一『だって．．．お前たちがいるだろ?あの時、必死で助けてくれた．．．温もりをくれたお前たちが。』

宗一は微笑む。

な・フ・は『あっ／＼／＼』

宗一『だから俺はさみしくなんかない。ここを出てもお前たちの優しさがあるから大丈夫だ。』

そう言った宗一だが．．．。

なのは『え?出て行くの?』

フェイト『まだ会ったばかりなのに．．．。』

はやて『嘘やろ?』

三人は悲しげな顔になる。

宗一『．．．。』

なのは『あっ、あの(ワサッ)．．．入っ?』

なのは宗一に抱かれていた。

宗一『俺はいつかまた帰ってくるよ。』

なのは『．．．う、うんっ／＼／＼／』

なんかいい感じに．．．。

フェイト『な、なのはだけズルい!!』

はやて『そつや!羨ましいわあ。』

なのは『えへへっ／＼／＼／』

宗一は続けてフェイトを抱いた。

フェイト『あっ／＼／＼／』

フェイト『ありがとうなフェイト．．．お前はいつまでも強くあれ。  
誰かを守るようにな。』

フェイト『う、うんっ／＼／＼／』

そして最後にははやてを抱く。

宗一『また会おうな。』

はやて『やつ、約束やで?』

宗一『ああ、わかってるよ。』

はやて『それじゃあ約束。』

はやては抱かれたまま小指を差し出す。

宗一『約束だ。』

宗一はその小さな小指に自分の小指を絡めた。

な・フ『はやて(ちゃん)長い!』

はやては二人に叱られた。

く過去く（後書き）

はあ、なかなか書けない。

次回『く旅立ちく』お楽しみに！

く旅立ちく（前書き）

別れ、そして約束。

ついにクライマックス!?

いや、終わらないし。終わらせないし!

それではどうぞ。

く旅立ちく

（宗一side）

『これは．．．あるな。それも．．．ある。よしっ準備OK！』

ゼロ『よろしいのですか？』

『なにが？』

アースラを出る準備をしている俺に声をかけるゼロ。

ゼロ『しばらくここにいては？』

『いいんだ。それに、俺は魔法の修行をするんだ。』

ゼロ『そうですか．．．。』

『あいつらが心配か？』

ゼロ『はい．．．。』

『はあ．．．。』

ゼロの言葉のため息が出てしまう。

『あいつらなら大丈夫だ。皆強い．．．心がな。』

ゼロ『ずいぶん自信ですね。』

『それに、約束したしな。必ず帰るって。』

ゼロ『そうですか……。』

『ああ、だから……。帰れるように、力を貸してくれ……。ゼロ。』

ゼロ『もちろんです。マスター。』

そして宗一は部屋を出た。

〈宗一 side out〉

それから向かったのはアースラの転送室。そこにはアースラのクルーが勢ぞろいだった。

宗一『ありゃ？皆さんどうしたんですか？』

クロノ『皆で見送りだ。』

宗一『そっか。ありがとう……。』

シグナム『高峰、次に会う時は手合わせ願う。』

宗一『あはは……。よろしくお願いします。』

シグナムのバトルマニアレベルに屈した宗一。

ザフィーラ『今回は助かった。例を言う。』

宗一『いえ、おれがやりたいことをしただけですよ。』

ザフィーラと硬く握手する。

シャマル『お体に気をつけて．．．。』

宗一『あの時は治療してくれてありがとうございます。感謝しています。俺、必ず帰ってくるから．．．待っていてくださいね（ニコッ）』

シャマル『はっ、はいっ！／／／／／』

なんだかいい感じになってる。

ヴィータ『お、おい！』

宗一『ん？ああ、あの時の．．．。』

ヴィータ『しっ、死ぬなよ！』

宗一『ありがとな。また会おうな。』

宗一はヴィータの頭を撫でる。

ヴィータ『うっ、うん．．．／／／／／』

ふ、フラグ．．．。

????『わ、私もいるですよ〜！』

はやての肩から声が・・・。

宗一『あれ?・・・小さい!?!?』

はやて『この子はリイン。ユニゾンデバイスなんよ。』

リイン『はいですっ!よろしくです、宗一さん。』

宗一『ああ、よろしくなリイン。握手できるかな?』

宗一は小指を差し出す。

リイン『はい、できますですよ!んしょっ。』

リインは一生懸命宗一の小指にしがみつく。

宗一『あはは、偉いぞ。』

リイン『えへへっノノノノノ』

リインは嬉しそうだ。

リンディ『行くのね・・・。』

リンディが悲しそうに問う。

宗一『はい。いろいろとお世話になりました。』

エイミィ『気をつけてね。』

エイミイもなんだか悲しそうです。

宗一『必ずまた帰りますから。』

リンディ『わかってるわ。』

エイミイ『もあ、レディを待たせるのは気に食わないな。』

宗一『まあまあ……。』

それから少女達と向き合う。

なのは『宗一君、気をつけてね?』

宗一『約束したろ?』

なのは『そうだけど、やっぱり心配だよ。』

宗一『ありがとな(ニコッ)』

なのは『はううう／＼／＼／』

なのは撃沈。

フェイト『宗一!』

宗一『フェイト……。』

フェイト『帰ってきたらたくさん話そう。』

宗一『そつだな。約束だ。』

フェイト『あと．．．／／／／』

宗一『なんだ？』

フェイト『遊園地．．．遊園地行こ！』

宗一『わかったよ。約束だ。』

フェイト『うんっ！』

フェイトは満面の笑み。

はやて『宗一君．．．。』

宗一『はやて．．．。』

互いに黙り込む。

はやて『抱いてくれへんか？』

宗一『へっ？』

宗一、間抜けな声。

はやて『最後にもう一回だけ．．．。』

宗一『はあ、わかったよ．．．(ワサッ)(ワサッ)』

宗一 ははやてを抱いた。

はやて 『落ち着くわあ．．．』

宗一 『そうか？ありがとな。』

はやて 『うんっ！／＼／＼／』

そして最後に．．．。

クロノ 『まったく、きみは異常だ。まあ、嫌いではない。必ず帰ってこい！』

宗一 『言われなくても帰るさ。』

クロノ 『そうか、なら安心だな。』

宗一 はクロノと硬く握手した。

宗一 『それじゃあ．．．またいつか、どこかで会おうな。』

次第に宗一の身体が光り出す。

宗一 『お世話になりました。それでは失礼します。』

そして消えて行った。

く旅立ちく（後書き）

別れって悲しいね。

次回『くひとまですく』お楽しみに！

〜ひとまず〜（前書き）

なんか疲れる。

今回は短いです。

それではどういづ。

くひとまず〜

シユバルツとの闘いを終え、アースラから出てきた宗一。行くあてもなく、ただ歩いていた。

宗一『はあ、腹減ったな．．．。』

ゼロ『大丈夫ですか？』

宗一『ああ、死にはしないさ．．．。』

ゼロ『だからあの時私は言ったんですよマスター。』

宗一『悪かったです！ゼロ様の言つとおりにしておけば良かったです！』

ゼロ『はあ．．．。』

時はさかのぼること三日前．．．。

宗一『ふう〜、疲れた！飯にしようぜ。』

ゼロ『はい、わかりました。』

そういつて宗一はアースラでもらってきた食料を用意する。

宗一『うむ、うまい！こりゃいいな。』

ゼロ『あまり食べ過ぎると後の分が無くなりますよ。気をつけてく

ださいね?』

宗一『わはっへるよ。』

食べながら(分かってるよ)と言っている。

ゼロ『嫌な予感しかしません・・・はあ。』

そして数分後・・・。

宗一『ゼロ様、もしかしてワタクシやってしまいましたか?』

ゼロ『・・・。』

ゼロは呆れて声が出ない。

宗一『だ、だって!美味しいじゃんこれ!・・・そっ、そうさ!これが美味しいのがいけないんだあ!』

ゼロ『認めましようよ。』

宗一『スンマセン、でも大丈夫!俺は必ずや食料にありつけると信じている!』

そして歩き出す宗一に・・・。

ゼロ『はあ・・・。』

呆れているゼロだった。

そして今に至る。

宗一『アレから三日、ワタクシは今だ食料にありつけていない。一体どうすればいいのだろうか。』

ゼロ『好きにしてください。』

宗一『随分と冷たいな!』

ゼロ『私は貴方とは違い、食料がなくても生きられます。少しは自分から行動を起こせばいいのでは?』

ゼロは平然としている。

宗一『行動?人助けとか?』

ゼロ『はい、そのようなことかと。』

宗一『ここで人助け?』

宗一は周りを見渡す。しかし見えるのは木だけ。そう、宗一は今深い森の中で迷子なのだ。

宗一『死のうかな?』

ゼロ『好きにして(できるかあ!!)...ください。』

宗一はツツコム。

ゼロ『しかし、こんなところで人助けなど(ドガン)...でき

ますね．．．。』

ゼロが言いかけた時、凄まじい爆発音が響いた。

宗一『な、なんだ!?!』

ゼロ『とにかく行きましょう。』

宗一『あ、ああ!!--ゼロ、セットアップ。』

ゼロ『Yes, Stoodby ready!』

宗一は向かった。しかし、彼はまだ知らない．．．。

?????』はあ．．．はあっ。』

また一つ、出会いがあることに．．．。

くひとまずく（後書き）

誰？誰なの？

出会い？

次回『く新たな出会い』お楽しみに！

く新たな出会いく（前書き）

ついにあのキャラ！？みたいなノリだけど、オリキャラです。

それではどうぞ。

〈新たな出会い〉

「????? side」

とある世界で、俺は敵に囲まれていた。

『はあ．．．はあ．．．。』

「????」『マスター、無事ですか!?!』

『フレア、気にするな。俺は大丈夫だ。』

俺はフレアと呼ばれるもの、おそらくデバイスであろう物に言い聞かせる。

フレア『大丈夫なわけありません! 貴方の今の魔力値で八つもドラグーンを使うのは無謀です。』

『わかってるさ! でもどうすれば．．．。』

そういったやり取りをしている内に、何十という敵が俺に襲いかかる。

『く、来たかつ! ! ! ．．．え?』

フレア『どうしました?』

『身体が．．．動かないっ!?!?』

フレア『ま、マスター!!』

俺は突然身体が動かなくなり動揺する。  
敵はすぐ目の前で大釜を振り上げる。

『だっ、ダメか!?!』

フレア『マスター!!』

《ズシャ》と、何かが切り裂かれる音が響き渡った。

ああ、俺は死ぬのかと一瞬諦め掛けた．．．が、しかし。

????『はあ、まったく．．．危ねえなあ。』

『えっ?』

俺は何が起きたのかわからなかった。目を開くと黒いロングコートを着た少年が敵を真つ二つに切り裂いていた。

?????sideout

宗一『はあ、まったく．．．危ねえなあ。』

????『えっ?』

ゼロ『マスター、敵40体です。』

宗一『了解した。』

宗一はゼロからの報告を受けると、敵に突っ込んだ。そして次々と

敵を倒して行く。

????『・・・凄い。』

フレア『はい・・・。』

少年はただ見ている事しかできなかった。

しばらくして、宗一は少年のもとに戻ってきた。

宗一『ふう〜、流石に腹が減るとやる気出ないなあ・・・。』

ゼロ『はあ・・・。』

宗一の言葉に呆れてため息を漏らすゼロ。

????『あ、あの?』

宗一『ん?なんだ?』

少年『助けってくれありがとう。』

少年は宗一に深々と頭を下げる。

宗一『頭上げないか?なんか苦手なんだ。頭下げられんの・・・。』

????『そ、そうなのか?』

宗一『すまないな。』

????『いや、いいよ。』

宗一『んじゃな……。』

宗一はその場を去ろうとする。

????『ま、まってくれ!』

しかし、少年に止められた。

宗一『なんだ?』

????『お、俺も付いて行く!』

宗一『は?』

少年の言葉に驚く宗一。

????『あんたは強い!俺、あんたに付いていきたい!』

宗一『はあ、どうせ拒んでも来るんだろ?』

????『当たり前だ!』

少年は嬉しそうに拳を前に突き出した。

宗一『俺は高峰 宗一。よろしく。』

????『俺は如月 大和。よろしく!こいつはフレアだ。』

フレア『よろしくお願いします。』

宗一『ああ、こっちはゼロだ。』

ゼロ『よろしく。』

大和『さっそく行くとしますか!』

大和ば張り切るが、《グウ》と誰かの腹がなる。

ゼロ『マスター……。』

宗一『仕方ないだろ!!!三日間飲まず食わずだぞ?』

大和『食べるか?』

大和は、宗一に大豆バーを渡す。

宗一『こ、これは伝説「早く食べてください」……はい。大和、ありがとな。』

宗一に呆れるようにツッコむゼロ。

大和『あ、ああ。』

苦笑いしながら言う大和だった。

く新たな出会いく（後書き）

いやあ、パーティー組んだね。

ま、これからも応援よろ！

次回『く機動六課く』お楽しみに！

〜機動六課〜（前書き）

彼女達久しぶりに登場！

テストヤバス！！

それではどうぞ。

〜機動六課〜

六年後

ここはミッドチルダの首都クラナガン。地球によく似た架空の世界。魔法文化が発達している。そこに建てられた機動六課。そこでは朝からハードなトレーニングが行われていた。どうやら模擬戦をしているらしく、爆発音が度々響く。

なのは『はい、朝はここまで！みんなシャワー浴びて昼食にしてね。』

????ー同『はいつー!!』

なのはの言葉に四人の少年少女が元気に返事をする。そして少年少女はトレーニングルームから出て行く。

なのは『ふう〜、疲れたあ!!』

なのはが大きく伸びをすると・・・。

フェイト『なのは、張り切りすぎてない？大丈夫？』

フェイトが心配そうに声をかける。

なのは『まあ、フェイトちゃんは心配しすぎだよ！私は大丈夫！』

『！』  
フェイト『そう？ならいいんだ。』

なのは『それよりフェイトちゃんも一緒に昼食にしない?』

フェイト『うん。いいよ。』

そういつて二人もトレーニングルームから出て行った。

それからしばらくして、みんなは昼食のため食堂に集まっていた。

なのは『みんなはお疲れ様。』

???『あ、なのはさん!フェイト執務官!』

一人の少女が勢いよくなのはに近づく。

なのは『スバルは相変わらず元気だね。』

スバル『そうですか?普通だとおもうんですけど。。。』

フェイト『でも、元気が一番だよ!』

スバル『はい、ありがとうございます!』

そういつてスバルは席に戻る。

それからなのは達が自分の食事を受け取り、スバル達のいる席に行く。。。。

はやて『なのはちゃん!フェイトちゃん!』

なのは『はやてちゃん!』

フェイト『仕事、済んだの?』

はやて『今は代わりにラインがやってるよ!』

なのは『ラインも頑張り屋さんだね。』

はやて『そうなんよ!ほな、飯にしようか?』

フェイト『うん。』

なのは達は席に腰をかけた。

スバル達はもくもくと昼食をたべている。

なのは『・・・あれから六年かあ。』

フェイト『・・・そうだね。』

なのはとフェイトは寂しそうな顔で言う。

はやて『はあ、二人とも・・・約束したやんか。宗一君が帰って来るまで元気でやるうって。』

たまらずはやてが口をひらく。

なのは『そ、そうだよね!』

フェイト『うん。はやての言うとおりでよ。』

二人は元気な顔つきになった。

スバル『なのはさん、前から気になってたんですけど、その宗一君って誰なんですか？』

隣からスバルが乗り出して来た。

???『こらっ！バカスバル！！すみません、なのはさん……』

なのは『大丈夫だよティアナ。』

ティアナと呼ばれた少女がスバルを抑えている。

スバル『うう、ひどいよティア……』

???『なのはさん、僕も気になります。』

赤髪の少年が言う。

なのは『エリオ……。』

???『わ、私も……。』

続いてピンク髪の少女も言う。

フェイト『キャラ口まで……。』

エリオ、キャラと呼ばれた少年と少女になのはとフェイトは戸惑う。

はやて『別に話しても大丈夫だよ、二人とも！後々会うかも知れへ

んし。』

なのは『そうだね、話すよみんな。』

フェイトも頷く。

なのは『あれは、六年前のこと……。』

それからなのはしばらく、宗一との出会いを長く語った。もちろん喫茶店の時からだ。

なのは『これが私達と宗一君の出会い。そして別れ。』

なのは達は再び寂しそうな顔になる。

スバル『宗一さんかあ。』

エリオ『会ってみたいな……。』

キャロ『怖くないかな……。』

キャロは少し恐怖心がある。

フェイト『大丈夫。宗一はとっても優しいから。』

キャロ『そうなんですか？』

フェイト『うん。』

フェイトはキャロに優しく言い聞かせる。

ティアナ『強いんですか？』

なのは『それは戦った人しか知らないよ。』

ティアナ『どういう事ですか？』

ティアナは首を傾げる。

なのは『宗一君が戦ってるの見たのは一回しか無いんだ。それも、モニター越しにね。』

フェイト『最初は現地で一緒だったんだけど、巻き込まって行って私達を逃がしたんだ。』

ティアナ『。。。』

ティアナは黙り込む。

はやて『モニターじゃ追いつけない程のスピード。。。武器が交わる時の火花しか見えへん。』

エリオ『す、すごい。。。』

エリオは息をのむ。

なのは『今頃なにしてるんだろ。。。』

フェイト『そうだね。。。』

はやて『わからへんな．．．』

三人は外を見つめていた。

なのは『さて、午後も頑張ろうね!』

一同『はい!』

なのは『スターズの二人は私とヴィータちゃんが見るね。ライトニングスはフェイトちゃんとシグナムさんが。』

フェイト『任せて。』

はやて『私はもう一仕事!』

フェイト『ラインが待ってるよ。』

はやて『そやね!』

そして、みんなはそれぞれ解散した。

〜機動六課〜（後書き）

テスト頑張ろうね！！

次回『〜奇跡の再開〜』お楽しみに！

く 奇跡の再開く (前書き)

再会は嬉しい!!!

さらにフラグが!!!

それではどうぞ。

〈奇跡の再開〉

〈宗一 side〉

俺達は今森をさまよっている。  
いく宛もなく、ただ歩いていた。

『ここはどこだ？』

大和『さあ？』

俺たちは周りを見渡しながら先に進む。

大和『宗一、あれはなんだ？』

大和は何かを見つけ指差した。

『ん？あれは・・・列車か？』

ゼロ『山岳のリニアレールのようです。』

フレア『しかし、あれは速すぎでは？』

リニアレールは物凄いスピードで走っている。

『乗っ取られたか？』

ゼロ『確率が高いですね。』

大和『行ってみる？』

『そうだな．．．ってあれは!？』

足を踏み出そうとした途端、俺たちの上をへりが通り抜けた。そして、四人の少年少女が次々と飛び降りている。

『最近飛び降り自殺とか流行りか？』

大和『知らないな．．．てか、変身したぞ？あれは．．．デバイス!？』

飛び降りている少年少女は光に包まれて、白を基調とした服に変化した。

『あのバリアジャケット．．．。』

俺はその服を見た事があるような気がした。

大和『どうかした？』

『いや、それよりもあれ見ろよ．．．。』

大和『うわあ．．．何か生えて来た。』

リニアレールを囲うように現れる多くのワーム

ゼロ『あれはガジェットですね．．．。』

『ガジェット?どう見てもあれはガンダムヘツ』行きましよう。」「

．．最後まで言わせるよ！』

大和『はあ．．．。』

大和はため息を漏らす。

『俺はあっちに行くよ。』

大和『わかった。気をつけるよ。』

『俺を誰だと思ってる。』

大和『高峰 宗一。』

『もういいよ。ゼロ．．．セットアップ！』

ゼロ『Yes Standby ready』

大和『フレア、セットアップ！』

フレア『Yes Standby ready』

そして俺達はそれぞれにわかれて飛び立った。

（宗一 side out）

ここはエーリム山岳丘陵地区。山岳のリニアレールがガジェットに乗っ取られて暴走している。機動六課のFW陣は暴走を止めるべく現場に来ていた。訓練用のデバイスから実戦用のデバイスに変えていた時にアラートが鳴り響いたため、直行したのだ。

スバル『うわぁ、いつぱいだ!!』

ティアナ『騒がない!行くわよ!』

スバル『うん!』

二人の少女はガジェットに突っこむ。

ティアナ『まったく・・・キリが無い!!』

スバル『本当だよ!』

そうしているとスバルの足にガジェットが巻きついた。

スバル『え?うわぁ!!』

ティアナ『スバル!!』

ティアナはひたすらスバルの足に巻きついたガジェットを撃つが当たらない。

ティアナ『当たってよ!!』

そのうちにスバルにもう一体ガジェットが近づく。

スバル『くっ・・・動けない。』

そして《ドガン》と、爆発音が響く。

ティアナ『スバル〜!!』

ティアナはその場に膝を着いた．．．しかし。

???『はあ、二人で突っ込むなんて無謀だな。』

ティアナ『え?』

目を開くと、黒いコートにフードをかぶった人が気絶したスバルを抱えてティアナの前に立っていた。

所変わって少し離れた所でライティングスの二人、エリオとキャロがガジェットに囲まれていた。

エリオ『はああ!!』

エリオは次々とガジェットを倒す。

キャロ『エリオ君大丈夫?』

エリオ『大丈夫!まだまだあ!!』

エリオは突っ込む。しかし後ろから不意にガジェットに攻撃される。

エリオ『ぐはっ!!』

キャロ『エリオ君!!』

エリオはかすかに意識を保っているが動けない。

キヤロ『どっしょう．．．』

キヤロは泣きそうになりながらつぶやいた。すると．．．。

???『泣くなよ。大丈夫だ！俺が何とかする。』

キヤロ『へ？』

キヤロは声が聞こえる方に顔を向ける。そこには黒いコートにフードをかぶった人がキヤロを背中から包むように肩に手を置きしゃがんでいた。

???『大丈夫か？』

キヤロ『はっ、はい！でもエリオ君が！』

???『治療魔法は使える？』

黒いコートの人はキヤロに優しく問う。

キヤロ『少しなら．．．』

???『そっか、わかった！』

すると黒いコートの人はその場から一瞬で消えた．．．と思っただけで再び現れた。しかもエリオを抱えている。

キヤロ『え？あれ？』

???『話は後だ。今は「おい宗ー！！」．．．なんだ？』

黒いコートの人の前にモニターが展開された。そこには赤い髪に鋭い目つき。耳にピアスといった、いかにも悪いという雰囲気の方が写っていた。

宗一『いきなりなんだ？こちらは忙しいんだが？』

????『知らないよそんなの！しかも何で俺の方がガジェットおおいんだ！？』

宗一『そんなの決まってるだろ。大和……。』

大和『な、なんだよ……。』

少しの沈黙。

宗一『面倒くさいからだ！』

大和『んな理由か！？しかも今の間はなんだ？』

大和は怒鳴る。

宗一『こつちが終わり次第そつちに向かうさ。それまで待て。』

大和『はあ、わかったよ。』

そうつってモニターは消えた。

宗一『さて、君。』

キャラ『は、はい!』

キャラはいきなり呼ばれて慌てる。

宗一『そんなに堅くならなくていいよ。柔らかく・・・ね?』

キャラ『わかりました。』

宗一は優しく微笑みながら言うが、キャラには見えていない。

宗一『とりあえず、この少年に治療魔法かけてくれないか?』

キャラ『はい。』

キャラはエリオに近づき両手をかざす。するとエリオを包むようにして光る。

キャラ『このまま・・・。』

キャラは不安そうにつぶやく。

宗一『安心しろ、お前たちは俺が守る。』

キャラ『は、はい!／＼／＼／＼』

宗一の一言に頬を赤くするキャラ。しかし宗一の後ろから大量のガジェットが襲いかかる・・・はずだったが。

《ズババっ》

キャラ『へ？』

キャラは思わず間抜けな声を出す。

宗一『はあ、危ないな。』

そう。宗一は大量のガジェットを一瞬にして粉々に切り裂いたのだ。しかも切り裂いた事も認知できないくらいに早く。

エリオ『うつ．．。』

キャラ『エリオ君!!』

やがてエリオが目を冷ます。

宗一『元気か？』

エリオ『っ!?!?』

エリオはキャラを守るように宗に向けてエスパードを向ける。

キャラ『エリオ君、違うの!!この人が私達を助けてくれたんだよ  
!!!!』

エリオ『え?』

エリオは慌ててデバイスを下ろす。

エリオ『す、すみませんでした!!それと、ありがとうございました。  
』

エリオは頭を下げた。

宗一『どういたしまして。つといけない！向こう行かないと！！すまないな、これで失礼する。』

そういつて宗一は飛び立った。

そして所変わって大和側。

大和『お嬢さん、大丈夫か？』

ティアナ『はい！』

大和はドラグーンを発動させている。ティアナはドラグーンと共にガジェットを撃ち抜いて行く。しかし次から次へと現れるガジェットに苦戦していた。

ティアナ『あんな数・・・無理！！』

大和『くそ、宗一いゝ！！』

宗一『なんだ？』

《ヒュンヒュンツ》と何本もの黒い光がガジェットを一瞬で貫いた。

《ドガン》と再び爆発音が響く

宗一『ふわぁ〜・・・眠い。さっさと片付けるぞ大和！！』

大和『分かつてるよ宗一!!』

その時、数百ものガジェットが襲いかかって来た。

ティアナ『う、後ろ!!』

ティアナは叫んだ。しかし……。

宗一『……バインド……』

宗一がつぶやくと、数百ものガジェットが動きを止めた。

ティアナ『んなっ!?!』

ティアナは声が出せない。

数百ものガジェットの首を一瞬でバインドを使って縛っていたからだ。そして、宗一はその場から一瞬で消えた。宗一が現れたのは数百ものガジェットの頭上持っていた杖が剣に変わり、振りかぶっている。

ティアナ『い、何時の間に……』

大和『まったく、俺の出番なしか……』

大和は悲しむ。ティアナは宗一をずっと見ている。そして……。

宗一『火炎……龍波斬!!』

宗一が叫び剣を振ると、数百ものガジェットが次へと炎のような赤黒い波に飲まれて行く。まるで龍に食われるかのように。

数百ものガジェットはその一撃で全てが完全に停止した。

宗一『よつと．．．。』

宗一はティアナと大和の側に降り立つ。

大和『お疲れ、やっぱり宗一にはかなわないな。』

宗一『いや、そろそろ俺も危ないかな。』

宗一と大和が楽しく話していると．．．。

なのは『あ、あの!!』

フェイト『あなた達は?』

大和『ただの旅人だ。』

なのは『旅人．．．。』

大和『そ、旅人さ。』

なのは達は大和の言葉を軽く流しなから、もう一人ねフードをかぶった人を見つめていた。その時、強い風が吹いた。当然、宗一のフードも脱げる。

なのは『やっぱり．．．。』

フェイト『宗一．．．だったんだね。』

宗一『はあ、バレたか。』

宗一は笑ながら言う。

《ドサツ》という音がした。

なのは『よかった．．．生きて帰って来てくれて．．．。』

フェイト『約束．．．守ってくれたんだね．．．。』

なのはとフェイトは宗一に抱きついていていた。

宗一『まあ、偶然その森をうろつろしてたらリアレールみつけて来ただけなんだがな。』

宗一は苦笑いしながら言う。

なのは『じゃあ、奇跡の再会だね。』

なのはは笑顔で言う。

フェイト『そうだね。奇跡の再会だよ。』

フェイトも言う。

宗一『あはは、そうなるな。まあ、ひとまず．．．ただいま。』

そして宗一は．．．。

な・フ『うんっ！！お帰り。』

少女達と再会を果たしたのだった。

大和『俺は・・・？』

大和は一人空気に化していた。

なのは『帰ろっか、』

フェイト『そうだね。』

宗一『アースラにか？』

なのは『あ、宗一君はまだ知らないよね。』

なのはの言葉に宗一は首を傾げる。

なのは『今はミッドチルダのクラナガンっていう所にはやてちゃんが部隊長の機動六課が建てられたんだ。』

宗一『機動六課か、じゃああの少女達は？』

フェイト『FW陣。そこにいるティアナとスバルは、なのはが隊長のスターズ。今はいないけど、エリオとキャロは、私が隊長のライトニングス。』

フェイトは簡潔に説明する。

宗一『へえ、随分と変わったな。』

なのは『六年間・・・。』

フェイト『長かったね。でも．．．。』

なのは『うん、やっと会えた!』

再び二人は笑顔。そんな中、なのはの目の前にモニターが現れた。

はやて『なのはちゃん!! フェイトちゃん!!』

なのは『はやてちゃん!?!』

はやてのいきなりの出現に驚くのは。

はやて『二人ともズルいで!! 私も宗一君に会いたいんよ!?!』

なのは『わかった! すぐに帰るから!』

フェイト『うん。ごめんねはやて。』

宗一『ま、帰りますか。大和。』

宗一は大和を呼ぶ。

大和『やっと出番か!! なんだ?』

宗一『帰るぞ。』

大和『へいへい、わかりましたよ。』

大和は落ち込んだ。

やがて出てきた夕日が宗一を照らす。

な・フ『あっ．．．／／／／／』

風に揺られる髪と、黒いロングコート。

その姿になのはとフェイトは頬を赤くする。

ティアナ『．．．／／／／／』

そして彼女もまたその一人だった。

そして宗一は気絶しているスバルを抱えて飛び立った。

く奇跡の再開く（後書き）

再会は嬉しい！！

しつこいな。

次回『く強さの訳』お楽しみに！

〈強さの訳〉（前書き）

実はStrikers編あまり覚えてない！

多少違つかもしれないが・・・気にしたら負けさー！キリッ

それではどうじや。

〈強さの訳〉

再会を果たした宗一はその後、なのは達に連れられて部隊長室に来ていた。

はやて『久しぶりやな、宗一君。』

宗一『ああ、久しぶりだ。元気にしてたか？』

はやて『そりやもう、元気バリバリやで。』

宗一『そっか、よかった。』

宗一は微笑む。

はやて『は、反則や．．．／／／／／』

宗一『ん？何か言ったか？』

はやて『な、なんでもあらへん！』

二人がいい感じの雰囲気醸し出していると．．．。

なのは『むっつ、宗一君！はやてちゃんばかり．．．。』

フェイト『ズルいよ！』

二人が詰め寄る。

宗一『おわっ！何だよいきなり……』

宗一は驚く。

なのは『今から夕食だけど、宗一君はどうする？』

フェイト『よかったら私たちと食べない？』

宗一『そうしたいのも山々だが……大和が。』

はやて『やまと？』

なのは『宗一君と一緒に旅してた人だよね？』

宗一『ああ、ほら。あそこで縮こまってるやつだ。』

宗一が指差した方向に三人が視線を向ける。

大和『……どうせ俺は空気だよ……』

しゃがみこんで地面に人差し指で円を描き続ける大和。

フェイト『大丈夫なの？』

フェイトは苦笑いしながら言う。

宗一『おい、大和！！部屋行こうぜ。その後夕食だ。』

宗一が大和に声をかける。

大和『本当かつ!?!』

食いつく大和。

宗一『ああ。はやて、部屋あるか?』

宗一ははやてに問う。

はやて『あるよ。二人部屋でええか?』

宗一『ああ、サンキュー。早速案内頼むよ。』

はやて『了解や!リイン、案内してやって。』

はやてが言うと、宗一の目の前に小さな女の子が現れた。

宗一『うわあ、久しぶりだなリイン!!覚えてるか?』

リイン『忘れるわけじゃないですよ〜!!』

宗一『あはは、握手しないか?』

そついうと宗一は小指を差し出した。

リイン『はいです〜!よいしょ。』

リインは一生懸命宗一の小指にしがみつく。

リイン『それじゃあ行きますよ〜。』

宗一『ああ。』

大和『了解!』

はやて『ほなまた後でなあ。』

なのは『またね。』

フェイト『後でね。』

三人が手を降る。

宗一『おう!またな。』

宗一は微笑む。

な・フ・は『はううゝ．．．／／／／』

そして宗一達は部隊長室から出ていった。

しばらくして宗一達は部屋に着いた。

リイン『ここですよ!』

宗一『ありがとう。』

大和『サンキュー!』

リイン『いえいえ、それじゃあ私はまだ仕事がありますから失礼しますね!』

リインは嬉しそうに帰って行った。

大和『宗一！メシ食おうぜ！！』

宗一『先に行つていいぞ。俺は行きたい所があるから。』

大和『了解！メシだあ〜！！』

大和は走つていった。

宗一『はあ．．．。』

宗一はため息を漏らした。

そして宗一も歩き出す。

宗一『シャワー浴びたいんだよなあ。』

そうつぶやいた。

くエリオsideく

僕はいまシャワーを浴びています。今日は疲れました。

『ふう〜．．．。』

そうつぶやいてくつろいでいると．．．。

《ガチャ》

誰かが入って来ました。

「???」ふう〜。ゼロ、久しぶりに力を使ったな。」

ゼロ「はい、本当に久しぶりでしたね。しかしながら、ここに長居するなら……。」

「???」ああ、わかってる。力を使わざるを得ない。」

ゼロ「はい。」

その人はゼロと呼ばれた人？に話しかけていた。僕はこっそりシヤワールームから顔を出す……。すると。

「???」あれ？昼間の……。」

「え？」

「???」……ああ、あの時はマント被ってたから分からないか。

ほら、昼間の事故の時。助けたる？」

エリオ「……あつ。」

僕は一瞬わからなかった。昼間のマント被ってた人。僕達を助けてくれた人だと言われて戸惑っていたから。

「???」これでどうだ？ゼロ、頼むよ。」

ゼロ「Yes, my master……。」

その人の体は光だした。再び現れた時……。

エリオ『あぁっ！！』

確信づいた。彼の持つ杖だ。疑いようもない、その杖は昼間のマントを被っていた人が持っていた杖だ。恐らくゼロとはデバイスなんだ。

???『わかつたか？』

エリオ『はい、すみません。』

???『謝るなよ。んしょ……。』

その人はデバイスを待機状態のネックレスに戻した。

???『俺は高峰 宗一。よろしくな！』

エリオ『はい、僕はエリオ・モンディアル三等陸士です。よろしく  
お願いします。』

僕は自己紹介した。

宗一『隣使つぞ？』

エリオ『はい！』

そっいつて宗一さんは服を脱いだ。

エリオ『っ！？』

僕は息を飲んだ。なぜなら……。

宗一『ん？ああ．．．驚いたか？』

宗一さんの体は切り刻まれたような跡が所々あり、痛々しかったからです。

エリオ『どうしたんですか．．．それ。』

宗一『．．．知りたいか？』

とても深刻な顔で宗一さんは僕に聞いて来た。

エリオ『．．．はいっ。』

僕は聞きたかった。

宗一『なあ、エリオ。お前はなぜ管理局に？』

エリオ『そ、それは．．．強くなって、沢山の人たちを守りたいから。』

宗一『これは強さを求めた結果だ。』

エリオ『え？』

宗一『これは四年前の事だ．．．。』

宗一さんは話し始めた。

（エリオsideout）

四年前．．．

とある世界で、宗一と大和は歩いていた。

宗一『この辺りなんだが？』

ゼロ『はい．．．。』

大和『それにしても殺風景な所だな．．．。』

フレア『そうですね．．．。』

そこは見渡す限りの岩山。自然など存在しない。宗一達がそう思っていたら．．．。

《ドゴーン》

宗一『な、なんだ！？』

大和『宗一、あれ！！』

宗一『ん？．．．な、なに！？』

大和が指差した方向に宗一は目を向ける。

宗一『なんだあの数は！！』

そう、今の爆発音で数千という敵が現れた。

宗一『行くぞ！ゼロ、セットアップ！！』

ゼロ『Yes Standby ready!』

大和『フレア!』

フレア『Yes Standby ready!』

二人は数千という敵に突っ込んだ。  
それから三時間後・・・

大和『宗一!無理だ!逃げないと・・・うわあっ!!!』

宗一『大和!!・・・くそっ・・・ゼロ、リミッター全解除!!!』

ゼロ『無茶です!大和を連れて逃げましょう。二人では無謀です!』

宗一『お、俺はお前のマスターだ!いう事は絶対だ!』

宗一は震える声を絞り出す。

ゼロ『マスター・・・。』

宗一『強くならなきゃいけないんだ!この世界を救うには、強くな  
らなきゃ!!!』

ゼロ『しかし・・・マスターの体が持ちません!!!』

宗一『そんなのどうでもいい!!!』

ゼロ『・・・わかりました。Limit all release』

宗一の周りの空気が揺れる。

宗一『よし．．．行くぞ！龍牙一閃！！』

宗一は次へと敵を切り倒す。それと同時に．．．。

《ブシュッ》

魔力反動で宗一の身体は次々と傷つく。

宗一『うぐっ．．．！！』

ゼロ『マスター！！』

宗一『うおお！！』

もはやゼロの声は宗一に届かない。

宗一『デス．．．ブレイカー！！』

そして世界は闇に包まれた。

大和『ん、んんっ．．．。』

フレア『マスター、大丈夫ですか？』

大和『ああ．．．って、宗一は！？』

大和が辺りを見回すと、一人の少年が血まみれで倒れていた。

大和『しゅ、宗一！！』

大和は宗一に駆け寄る。

宗一『．．．。』

宗一は息はあるが意識がない。

大和『宗一．．．。』

大和は傷たらけの宗一を見て涙を流した。

ゼロ『マスター．．．は．．．大丈夫．．．夫．．．です。』

ゼロの声にもノイズが走っている。

大和『ごめん．．．宗一。』

大和は宗一に治療魔法を長時間掛け続けたのだった。

エリオ『．．．。』

エリオは黙り込んでしまう。

宗一『エリオには．．．そんな経験させたくない。』

エリオ『宗一さん．．．。』

宗一は語った。過去最大の悲劇を。

宗一『今は、自分の出来る範囲で強くなれ。』

エリオ『・・・はい・・・兄さん。』

宗一『え？』

宗一はエリオの言葉に驚く。

エリオ『すつ、すみません！なんか、宗一さん・・・兄さんみたいですから。』

宗一『・・・いいぞ。』

エリオ『へ？』

宗一『兄さんでいいよ。』

宗一は優しく微笑んだ。

エリオ『兄さん・・・。』

宗一『ああ。エリオ、夕食食べたか？』

エリオ『いえ、今からですが。』

宗一『敬語なし！』

エリオ『あ、う・・・うん。』

宗一『一緒に食うか？』

エリオ『あ、うん!』

宗一『んじゃ、行くか。』

宗一は身体をタオルで拭き、服を着る。

宗一『エリオ。俺、今日来たばかりだから案内よろしく!』

エリオ『うん。任せて!』

エリオは嬉しそうに歩き出す。

宗一はその後ろ姿を見ながら着いて行く。

宗一『強く優しく・・・幸せに。』

エリオには聞こえないように呟くのだった。

く強さの訳く（後書き）

四年前ヤバイ!!

次回『く食事く』お楽しみに!

〜食事〜(前書き)

またもフラグが!?

テスト三日前!

それではどうぞ。

く食事く

その後、宗一はエリオと共に食堂を訪れていた。

宗一『うわぁ、もういっぱいだな。』

エリオ『そうだね．．．あっ！兄さん、空いてるよ。』

エリオは空いてる席を指差した。

宗一『おっ、でかしたぞエリオ！！』

エリオ『えへへ！』

エリオは宗一に褒められて上機嫌だ。

宗一とエリオは席に着いた。

エリオ『兄さん、なに食べる？僕が取ってくるよ！！』

宗一『本当か？ん．．．エリオに任せるよ。』

エリオ『わかった。じゃあ待ってて！』

エリオは走っていった。

エリオが帰ってくるのは、案外早かった。

エリオ『兄さん、お待たせ！』

宗一『お、サン．．．キュー。』

宗一は某前としている。なぜなら・・・。

エリオ『パスタでよかった?』

宗一『あ、ああ。パスタは好きだが・・・量が。』

そう。エリオはとても大食いだった。  
当然、盛るパスタの量も半端じゃない。

エリオ『え?少なかつた!?』

エリオは慌てる。

宗一『いや・・・いいです。ありがとう。』

エリオ『えへへ!』

またもエリオは上機嫌。  
と、そこに・・・。

???『あ、あのお。』

宗一『ん?』

一人の少女が現れた。

~~~~~side~~~~~

私は食堂に來ています。

夕食を食べに来ました。

『ん、空いてないかな?』

辺りを見渡しても空いてる席が見当たらない。

『どうしよう．．．あれ? エリオ君?』

私はエリオ君を見つけました。声をかけようと思いました。なにやら急いでいる様子。手には山盛りになされたパスタが二皿。誰かと一緒なのかな? そう思いました。

そして、エリオ君は一人の男性の向かい側に座り話し始めました。

エリオ『兄さん、お待たせ!』

兄さん? 私は驚きました。さらに少し近づきます。

???『お、サン．．．キュー。』

エリオ『パスタでよかった?』

???『あ、ああ。パスタは好きだが．．．量が。』

どうやら、男の人はパスタの量に驚いているようです。

エリオ『え? 少なかった!?』

いや、エリオ君。少ない事は無いんじゃないかな?

???『いや．．．いいです。ありがとうございます。』

エリオ『えへへ!』

エリオ君、楽しそうだなあ．．．よし!私も行くぞ。

『あ、あのお。』

私は勇気を出して声をかけました。

（?????sideout）

?????『あ、あのお。』

宗一『ん?』

宗一は振り向く。そこにはエリオと同じ年くらいのピンク髪の少女がいた。

エリオ『あ、キャラ!』

宗一『あ、君もいたのか。』

キャラ『へ?私の事．．。』

キャラは少し怖がっている。

エリオ『キャラ、兄さんは悪い人じゃないよ。ほら、昼間の事故の時に助けてくれたマントの人だよ!』

キャラ『へ?えっ、ええ〜!~!』

キャラは叫ぶ。

宗一『あの後大丈夫だった？怪我とかしてないか？』

キャラ『い、いえっ！大丈夫です。』

キャラはモジモジしながら答える。そして、宗一の顔を見つめながら思い出す。

『安心しろ。お前達は俺が守る。』

キャラ『．．．／／／／／』

キャラは思わず頬を赤くする。

エリオ『キャラ？』

キャラ『へ？なんでもないっ！！』

宗一『いや、何もきてないよ．．．。』

宗一は苦笑いしながら言う。

キャラ『うう．．．／／／／／』

キャラは泣きそうになる。

宗一『大丈夫か？あ、そう言えば自己紹介がまだだったね。俺は高峰 宗一。よろしく！』

キャラロ『はい！私はキャラ・ル・ルシエ三等陸士です。』

二人は握手をした。

エリオ『キャラロはもう夕食食べたの？』

キャラロ『いや、まだなんだ。空いてる席が無くて……』

宗一『じゃあ、一緒に食べるか？』

宗一が言うつと……。

キャラロ『え？いや……その。いいんですか？』

キャラロは戸惑う。

宗一『エリオが沢山パスタ持って来てくれたからさ。分けようよ。』

宗一は微笑みながら言った。

キャラロ『それじゃあ……失礼します。』

キャラロは宗一の隣に座る。

宗一『いらっしやい。』

キャラロ『えへへ／＼／＼／』

キャラロは嬉しそうだ。

宗一『んじゃ、いただきます!』

エ・キ『いただきます!』

三人は食事をするのだった。

宗一『ふう、食ったあ。』

エリオ『僕も。』

キャラ『美味しかったです。』

宗一『あ、キャラ。口が汚れてるよ。ほら、こっち向いて。』

宗一が言うとキャラは宗一に顔を向ける。

宗一『はい。これでよし!』

キャラ『ありがとうございます。。。』

キャラはお礼を言うが、何故か浮かない顔をしている。

宗一『どうした?』

エリオ『キャラ?』

キャラはやがて口を開いた。

キャラ『宗一さんっ。。。』

宗一『ん？なんだ？』

キャラ『あの、その……だから。』

宗一『うん……。』

宗一は優しく頷きながら聞く。

キャラ『お兄ちゃん……。』

宗一『ふえ？』

キャラの言葉を聞いて、宗一は間抜けな声をあげる。

キャラ『お、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？／＼／＼／』

キャラは俯きながら言う。

宗一『あはは、エリオ！お前よりもキャラの方が素直だぞ。』

エリオ『に、兄さん……。／＼／＼／』

エリオは恥ずかしそうにしている。

キャラ『あつ、あの……宗一』「違うだろ？」……へ？』

キャラは首を傾げる。

宗一『呼んでもいいよ。』

キャラ『あつ!?!』

キャラは心が弾んだ。

キャラ『お、お兄ちゃん!?!』

宗一『うん、』

エリオ『よかったね、キャラ。』

キャラ『うん!』

それからしばらく三人で話していた。

宗一『そろそろ帰るか。』

エリオ『そうだね。』

キャラ『お兄ちゃんが行くなら……。』

エリオ『キャラは兄さんにベツタリだね!』

エリオは笑う。

キャラ『え? いや、違って……。』

キャラは俯く。

宗一『こらこら、エリオ。キャラを虐めるなよ?』

エリオ『虐めてないよ!!!』

キャラ『むっ!!!』

宗一『あはは!』

それから三人は食堂を後にした。

〜食事〜（後書き）

キヤロ最高!!

次回『〜訓練〜』お楽しみに!

〜訓練〜（前書き）

風邪です。

酷いです。

待たせてすみません。

それではごじやう。

く訓練く

宗一『ふわぁ．．．眠い。』

宗一は欠伸をしている。

大和はというと．．．。

大和『グアぁぁ〜!!』

大音量でイビキをかいていた。

宗一『．．．大和．．．。』

大和『グアー．．．ガッ!!』

宗一『こいつ．．．舐めてんのか?』

宗一は怒る。

大和『ガッ．．．ガッ!!』

《ブチッ》と何かが切れた音がした。

宗一『いい加減起きろやぁ〜!!』

《ドガン》という爆発音に続き．．．

大和『ふぎゃぁぁ〜!!』

という大和の悲鳴が部屋に響いた。

宗一『まったく、いつまで寝てるんだよ……。』

大和『いつまでって、まだ夜の12時だろ?』

《ブチツ》と再び何かが切れた。

宗一『昼の12時だ! 正午だ!』

大和『翔悟? 俺は大和だ。』

大和は相変わらずだ。

宗一『……。死ぬ。』

そしてまた《ドガン》という爆発音が響いた。

それからしばらくして、宗一と大和の二人は食事をとっていた。

大和『ぶはあく、やっぱり飯は最高だ!』

宗一『どんだけ食うんだよ。』

宗一は呆れていた。

なのは『あつ、宗一君!』

宗一『ん？なのは、おはよう。』

なのは『宗一君、今はこんにちはだよ。』

なのはは苦笑いしながら言う。

宗一『どごその馬鹿が、起きるといふ行為を知らないがために……  
なっ。』

宗一も苦笑いしながら言う。

なのは『そ、そうなんだ……。』

それからしばらくして、FW陣もやって来た。

エリオ『あっ、兄さん!!』

キャロ『本当だ!』

真っ先に二人の少年少女が駆け寄って来た。

宗一『おっ、エリオにキャロ。お疲れ様。』

宗一は二人に微笑んだ。

エリオ『はいつ!!!!』

キャロ『は、はいつ!!!!』

エリオは元気に返事、キャロは頬を赤く染めながら返事。

スバル『宗一さんだあ!!』

ティアナ『どうも。』

続いてスバル、ティアナの二人も合流。

宗一『みんな今から昼飯?』

なのは『うん、そうだよ。』

宗一『そっかあ、ねえなのは。昼から訓練室借りれない?』

なのは『うん、大丈夫だとおもっよ?』

宗一『そっかあ、なら大和。』

宗一が大和に声をかけるが・・・。

大和『モグモグ・・・モグモグ・・・ゴックん・・・ん?』

大和は間抜けな顔で反応する。

宗一『いつまで食ってんだよ!?!?』

《ゴカツ》と大和を殴る。

大和『痛いな!?!なんだよいきなり!?!』

宗一『午後から訓練室で殺るぞ。』

大和『ちよつと待て!!漢字が違つたる?』

宗一『つべこべ言つな。ほら行くぞ。』

宗一は大和を引つ張り食堂を出た。

なのは『あはは．．．大和君かわいそう。』

ティアナ『でも．．．。』

スバル『あれが．．．。』

エリオ『いつもの．．．。』

キャロ『お二人ですよね．．．。』

みんなは笑つのであつた。

そして食堂を出た二人はというと．．．。

大和『腹減つた．．．。』

宗一『知らん!!』

大和『誰のせいだよ!?!』

宗一『はあ?お前が言えるのか?朝は起きないし、いつも空気だし  
!!』

大和『一つ目は分かるが、なんだよ二つ目の俺がいつも空気って！』

宗一『．．．そつ、空耳だ！！』

大和『その間はなんだ！？しかもオロオロしながら言っても説得力無いし！！』

宗一『ああもう！！うるさいな。さっさと行くぞ。』

宗一はその場から早歩きで去る。廊下の角を曲がろうとした時．．．

???『うわっ！？』

宗一『ぬわっ！？』

少々小さな女の子？にぶつかつた。

宗一『だ、大丈夫か．．．って、あれ？』

???『ん？』

．．．。

???『宗．．．』

宗一『ヴィータ？』

そう、ぶつかったのはヴィータだった。

ヴィータ『いつ帰ったんだ？』

宗一『あれ？聞いてないのか？』

ヴィータ『なのはのやつ．．．』

宗一『まあ、いいじゃないか。ただいま、ヴィータ。』

宗一は微笑んだ。

ヴィータ『おつ、おう．．．／／／／』

ヴィータは顔を赤くして俯く。

???『ヴィータ、何をして．．．いる？』

さらに一人女性がやって来た。

宗一『シグナムか。』

シグナム『高峰？』

そう、シグナムだった。

シグナム『まったく、テストロッサはなぜ話さなかった．．．』

宗一『まあまあ。それより、ただいま、シグナム。』

再び微笑んだ。

シグナム「あ、ああ．．．／／／／／」

シグナムも顔を赤くした。

宗一「おっと、すまない。また後で話そう。大和、行くぞ。」

宗一は大和なるモノを連れて去って行った。

大和「モノってなんだよ!？」

宗一「どうした?」

大和「なんでもない。」

二人は歩いて行った。

二人は訓練室に到着した。

宗一「なかなか広いな。」

大和「だな。暴れ回れる。」

二人は訓練室の広さに少し驚いた。

宗一「さて、始めるか。」

大和「了解!!」

そういつて二人は向かい合う。

宗一『ゼロ、セットアップ!!--』

ゼロ『はあ、やっと出番。Yes、my master! Stand by ready!--』

大和『フレア、セットアップ!!--』

フレア『Yes、my master! Get set!--』

二人は光に包まれた。

宗一『さて、訓練がてら・・・殺るか。』

大和『だから漢字が・・・もついいよ。』

宗一『行くぞ大和!--』

大和『望む所だ!--』

そして二人はぶつかり合った。

〜訓練〜（後書き）

頑張れ俺！！

風邪菌飛んでいけ！！

次回『〜休み〜』お楽しみに！

くオリキャラ設定く（前書き）

なんかクダグダ。

風邪菌には打ち勝った！！

それではどうぞ。

## くオリキャラ設定

如月 大和

キサラキヤマト

17歳 170cm 60kg

容姿：赤髪が軽く乱れてツンツンしている。耳にピアスをしていてイカツイ顔。バリアジャケットは全身黒づくめ。黒いシャツ、黒いズボン、黒いロングコート。いかにも悪そうな感じだが、以外と優しく仲間を大切にするらしい。

魔力：AAA

魔力光：灰色

魔導士レベル：SS+

デバイス：フレア

真っ白な杖。それと共に体の周りを飛ぶドラグーンがある。杖で操作する。その他、剣、槍の二つの形態がある。ドラグーンによる後方支援が得意。

使用魔法？ シャープネスレイ

敵の周りにドラグーンを散らし、あらゆる方向から一斉射撃。

使用魔法？ クロスシールド

ドラグーンによるバリア。ビームをつなげ合わせシールドを作り出す。

使用魔法？ セロニクスバスター

ドラグーンからのエネルギーを杖の球体に集め発射する収束魔法。

使用魔法？ ???

使用魔法？ ???

使用魔法？ ???

〽オリキャラ設定〽 (後書き)

いきなりオリキャラ設定いれてすみません (^| ^ ;)

これからも頑張ります!!

次回、今度こそ『〽休み〽』お楽しみに!

く休みく(前書き)

長くなりそう。

それではどうぞ。

く休みく

ドガーン・・・ガキンツ!!

大和『はあああつ!!』

宗一『ふんっ!!』

二人の剣がぶつかり合う。

大和『くそっ、早い!!』

宗一『大丈夫か?』

大和『まだまだ!!』

そういつて大和は宗一に立ち向かう。二人が訓練室で戦闘を始めたのは三時間前。並の人間は既に倒れている。大和もギリギリだが、なんとか戦っていた。宗一に関しては、余裕の表情で大和の剣を受けている。

大和『ちっ、なんなんだよ。宗一は本当に人間か?』

大和は顔を引きつらせながら言う。

宗一『他に何に見えるんだ?それに、モノに言われたくないな!!』

大和『またモノか!?!いい加減やめろ。』

大和は日々の扱いに泣きそうになる。

宗一『まあいい。それにしても、大和・・・強いな。』

大和『ドラグーン使った方がいいけどな。』

宗一『使うか?』

大和『いいのかな?俺にドラグーンを使わせて。』

大和は笑ながら聞く。

宗一『俺が負けたら、夕飯奢る。お前が負けたら、俺に奢れ。』

大和『上等!!!フレア!!!』

フレア『OK, Mode second! Tipe dragoon  
!』

フレアの声と共に、大和の持つ剣の刃が分散し、大和の体を覆うように八つの物体が浮かぶ。

宗一『久しぶりに見たな。』

大和『そうだな。さて、宗一!覚悟はでき・・・てます・・・か?』

大和のさっきまでの余裕が一瞬で消えた。なぜなら・・・。

大和『ド、ドラグーン・・・!?!?』

大和が驚くのも無理はない。目の前の人物の体の周りにも自分のと色違いのドラグーンが浮かんでいるのだから。しかも数は大和の倍

宗一『驚いたか？』

大和『なっ、なぜドラグーンを!?!』

大和は大量の汗をかいている。

宗一『俺の希少能力レアスキル・・・神の目(God Eyes)だ。』

宗一は笑ながら言う。

大和『始めて見た。』

宗一『ああ、始めて見せたからな。』

大和『コピーか？』

宗一『・・・に、近いかな。』

宗一は大和の勘がいいのには少し驚いたが、直ぐに気を整える。

大和『へっ、でもマジモンには勝てないぜ!!! いけっ、ドラグーン!!!』

大和は勢いよくドラグーンを宗一に向けて飛ばす。

宗一『さっさと終わらせる。行くぞ!!!』

宗一もドラグーンを飛ばした。

ピュン・・・ピュンピュンっ!!

飛び交うドラグーンと、ドラグーンから放たれるビーム。

宗一『どうした？こんなもんか？』

宗一は軽々とビームを除ける。

大和『くそっ、数が!』

大和は必死になって除けていた。

宗一『そんなものに気を取られてていいのかな?』

宗一は笑う。

大和『なにっ!?!』

大和は最初、宗一が何をいつているかわからなかった。しかし・・・

大和『まさかつ!!』

宗一はドラグーンをコピーしたが、大和のように、デバイスではない。そのため、自分のデバイスはまだ手に持っていた。

宗一『暗く広がる漆黒の闇・・・。』

宗一は何かをつぶやき始めた。

大和『ヤバイ!!!フレア、クロスシールド!!!』

フレア『Yes, protect...』

大和は急いでシールドをはる。

宗一『全てを食らい...全てを消し去る...』

徐々にゼロの先端に漆黒の光が集まり始める。

宗一『その先は...無...』

光は次第に大きくなる。

宗一『誰もが震え...誰もが恐れる...』

大和『...』

宗一『たどり着くは...皆無つ!!!』

大和『...く、来る!!!』

大和は構えた。そして...!!!

宗一『放てっ!!!デスっ...ブレイカーあ!!!』

放たれた。宗一の持つ、最強の魔法が!そして大和の作ったシールドとぶつかった。

ゴゴゴゴッ!!

大和『ぐ、ぐうっ!!』

大和はギリギリ耐える。がつ．．。

宗一『食らええ〜!!』

バリバリっ!!

大和のシールドにひひがはいる。

大和『く、くそっ!!』

ドガン!!

大きな爆発音が響いた。

くエリオsideく

僕はいま、昼の訓練が終わり昼食をとっています。

スバル『あああ〜．．．疲れた!!』

スバルさんはテーブルに伏せています。

『あはは、スバルさん．．。』

ティアナ『こらっ、馬鹿スバル!!』

キヤロ『まあまあ．．．正直疲れましたし。』

キヤロが今にもスバルさんにゲンコツを落としそうにティアナさんを止める。

『なに食べようかな？』

キヤロ『エリオ君は食いしん坊さんだね。』

キヤロが聞いて来ます。

『食べないと後々大変だしね！！』

ティアナ『あんだといい、スバルといい．．．そんなに食べて大丈夫なの？お腹壊すわよ？』

ティアナさんが聞いて来ました。そんなに変かな？みんなが食べないだけかと思えます。

『大丈夫ですよ。』

スバル『まだまだ足りないくらいだよ！！』

スバルさん復活！！

ティアナ『あんだ、食べ物の話になると変わるわよね。』

スバル『えへへ、ありがとう！！』

ティアナ『褒めてないっ!!』

《ゴツンっ》と、ティアナさんのゲンコツが落ちました。スバルさん痛そうです。

キャロ『あはは．．．。』

そんな会話をしていると．．．。

ドガン!!

ティアナ『なっ、なに!?!』

ものすごい爆発音と地震が起こりました!!

『訓練室の方からですね。』

スバル『行こう!!』

キャロ『はいつ!!』

そして僕たち四人は走って食堂を出ました。

それから僕たちは訓練室にたどり着きました。隊長達は先に着いていたそうで、苦笑いしながら目の前の光景を見えています。

ティアナ『なのはさん!』

なのは『あ、ティアナにスバル。』

『フェイトさん!!』

フェイト『エリオ、キャラ!』

ティアナ『一体何が?』

ティアナさんは状況を聞いています。

キャラ『うわあ、訓練室がめちゃくちゃ……。』

『まさか……。敵!?!』

僕は構えましたが……。

フェイト『エリオ、大丈夫だよ。敵じゃないから。』

フェイトさんに言われて構えを解きました。でも一体誰が?

なのは『宗一君と大和君だよ。』

ティアナ『へ?』

ティアナさん、間抜けな声……。って、兄さん!?

『兄さんが!?!』

キャラ『お兄ちゃん……。』

僕とキャラは兄さんを心配しました。まさか負けたり……。。

フェイト『うん．．．って、兄さん？お兄ちゃん？』

あ、フェイトさんやみんなにはまだいってなかった。

『あの．．．その．．．。』

僕が戸惑っていると．．．。

キャラ『昨日．．．一緒にご飯食べて．．．。』

なのは『あ、そういえば。キャラとエリオは居なかったね。』

フェイト『あ、そうだったね。ちゃんと食べたの？』

キャラ『は、はい！お兄ちゃん．．．宗一さんが一緒に食べようとして．．．／／／／／』

なのは『にゃはは、やっぱり宗一君．．．。』

フェイト『うん、優しいね。エリオはどうして？』

フェイトさんが僕に降りました。

『あ、えっと．．．シャワールームで．．．。』

あれ？これじゃ何か危ない．．．？

なのは『し、シャワー！？』

フエイト『だ、ダメだよエリオ!!』

『え?え?』

僕は何がなんだかわかりませんが、勘違いされてるようでした。

『ちっ、違います。シャワールームでばったりあって、僕に．．．強さの意味、力の意味を．．．教えてくれました。』

なのは『宗一君の強さの．．．意味。』

フエイト『力の．．．意味か。』

ティアナ『それで?その意味って?』

ティアナさんが訪ねます。

『．．．。』

兄さんとの約束．．．。

なのは『エリオ?』

フエイト『どうしたの?』

『すみません、教えられません。』

そう言うしか無かった。

ティアナ『何よそれ?』

『あまりにも．．．残酷で．．．。』

なのは『あ．．．。』

フェイト『．．．。』

なのはさん、フェイトさんは何かに気づいたようでした。

なのは『そっか、ごめんね。』

フェイト『ありがとう。それと、よかったね、エリオもキャラも。優しいお兄ちゃんに会えて。』

フェイトさんが笑顔でいいます。

キャラ『はい!』

『はい!』

僕たちは元気に返事をしました。

それからしばらくして．．．。

宗一『ん?お前ら、何してんだ?』

兄さんが来ました!!

〈エリオside out〉

宗一『ん？お前ら、何してんだ？』

なのは『あ、宗一君！！』

フェイト『宗一。』

宗一に駆け寄る二人。

なのは『ものすごい爆発音が聞こえて．．．』

フェイト『みんな来ちゃった。』

どうやら六課中に響いていたようで．．．。

宗一『す、すみませんでした．．．。』

宗一は渋々頭を下げた。

エリオ『兄さん！！』

キャロ『お兄ちゃん！！』

さらに二人。

宗一『おつ、二人とも。』

キャロ『大丈夫．．．？』

キャロの上目遣い．．．たまらない。

宗一『ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう。』

宗一は微笑みながらキャラの頭を撫でる。

キャラ『えへへ．．．／／／／／』

なんだかいい感じの雰囲気の中で．．．。

なのは『むう．．．。』

フェイト『キャラばかり．．．私達だって。』

なのは『心配したのに．．．。』

羨ましそうに言う二人。

宗一『ああ、二人ともありがとう。』

再び微笑んだ。

な・フ『はううう．．．／／／／／』

《バタリ》と倒れてしまった。

宗一『おお〜い．．．もしも〜し?．．．ダメだなこりゃ。おい、  
そこの二人?』

ティアナ『は、はいっ!〜!』

スバル『なんででしょうか!?!』

二人は慌てて返事をした。なぜなら……。

宗一『ん?どうした?』

ティアナ『い、いえ……// // //』

スバル『な、何でもありません……// // //』

二人も宗一の微笑みに飲み込まれたからだ。

宗一『こいつと一緒に倒れた二人を運ぶから、手伝ってくれない?』

エリオとキャラも。』

そういつて肩に抱えている大和を指差しながら言う。

ティアナ『はい!……って、何時の間に!?!』

スバル『全然気づかなかった……。』

エリオ『はい……。』

キャラ『私も……。』

みんなの反応に……。。

宗一『あはは、やっぱり空気なのな。』

宗一は呆れるしかなかった。

くシャマルsideく

ここは六課の病室。私はいつもここで働いています。今はシグナムとヴィータが来ています。

ヴィータ『まったく．．．宗一のやつー!!』

シグナム『よほど懐いているなヴィータ。』

ヴィータ『そ、そんなんじゃないやねえよ!!』

シグナム『説得力ないぞ．．．?』

むう、二人とも．．．宗一君に会ったなんて羨ましいです。

シャマル『はあ、二人はいいですね。宗一君に会えるなんて。』

ヴィータ『だ、大丈夫だシャマル。きつと会える。』

ヴィータが一生懸命フォローする。

シグナム『そうだ、こうして話しているうちにも現れるかも知れぬ。』

シグナムの言葉と同時に《プシュー》と医務室の扉が開いた。

シャマル『宗一君．．．。』

宗一『何だ?』

シャマル『へっ?』

シグナム『なっ!?!?』

ヴィータ『あはは、噂をすれば．．．だな。』

そう。扉から入って来たのは宗一だった。

宗一『シャマル、呼んだ?』

宗一は首を傾げる。

シャマル『し．．．宗一．．．君?』

宗一『ん?』

シャマル『宗一君!?!』

《ポフツ》

ヴィータ『んなっ!?!?』

シグナム『くっ!?!』

宗一『おっ、おいシャマル。どうした?』

シャマルは宗一に飛びつき、強く抱きしめていた。

シャマル『．．．6年間．．．。』

宗一『あ．．．。』

シャマルのつぶやきに宗一は驚く。

シャマル『まったく、宗一君は待たせすぎです!!--』

宗一『．．．すまない。』

シャマル『許しません。』

宗一『許さなくていいから、離れない?』

シャマル『えっ?．．．はあっ!?!?!?!?!』

シャマルは今になって、やっと自分が宗一に抱きついているのを理解した。

シャマル『す、すみません．．．// // //』

宗一『あ、ああ。それより．．．。』

《ドサツ》と宗一は肩に抱えている大和を下ろす。

シャマル『この人は?』

ヴィータ『さっき宗一といたやつだな。』

シグナム『何があったんだ?』

三人は問う。

宗一『訓練室で殺った。』

即答。

ヴィータ『じゃあ、さっきの地震と爆発音は．．．。』

宗一『はい、私のデスブレイカーです．．．。』

シグナム『訓練室は大丈夫だよな?』

シグナムから殺気が溢れる。

宗一『あ、えっ?あはは．．．。』

誤魔化そうと必死な宗一だが、簡単にはいかず．．．。

シグナム『大丈夫．．．だよな?』

シグナムの殺気がさらに溢れる。

宗一『．．．すみません!!めちゃくちゃです!orz』

見事なスライディング土下座が決まり．．．。

シグナム『高峰え〜!!』

《ガゴーン》と、見事なゲンコツが決まった。

宗一『みんな。入っていいぞ。』

《プシュー》と再び扉が開いた。

ティアナ『失礼します。』

スバル『あの、なのはさんたち．．．どこに？』

宗一『ああ、そのベッド。二つ空いてるだろ？』

スバル『わかりました！！』

スバルは相変わらず元気。

エリオ『に、兄さん！？』

キャロ『だ、大丈夫？』

宗一を心配する二人。

宗一『大丈夫だ。このくらい、悪の帝王が飼っているケルベロスに噛まれるよりは痛くない。』

そい言いながら、ゲンコツにより出来たタンコブをさする宗一。

ヴィータ『てか、悪の帝王って誰だよ？』

宗一『会ったことないけどね！！テヘッ。』

ヴィータ『無いんかい！？』

《ガゴーン》と、再びゲンコツ。

宗一『そ、それじゃシャマル。三人をよろしく。』

シャマル『はい、分かりました。それと．．．宗一君。』

出て行こうとしたらシャマルに呼び止められた。

宗一『なんだ？』

シャマル『あ、あのっ．．．。／＼／＼／＼明日は一日休みらしいので．．．その．．．一緒に街まで出かけませんか？／＼／＼／』

頬を染めながらシャマルは問う。

宗一『みんな休み？』

シャマル『はい。はやてちゃんが、最近みんな働きすぎて疲れてそうだからって。』

宗一『そっか、はやてらしいな。』

シャマル『それで．．．その．．．。』

宗一『いいぞ。』

シャマル『へ？』

宗一がすんなりOKしてくれたため、間抜けな声が出てしまう。

宗一『せっかくの休みだ。それに、シヤマルには前も色々世話になったし、お礼も兼ねて。』

シヤマル『あ、ありがとうございます！！』

シヤマルは嬉しくてたまらないようす。

宗一『それに．．．休みって、そういうためのモンだろ？楽しもうよ、シヤマル。』

シヤマル『はい。では明日、朝の10時に校舎の入り口前に。』

宗一『了解しました。』

そういつて手を降りながら宗一は医務室を出て行った。自分を睨む視線が二つも存在しているとも知らずに。

それから宗一は六課の調整室を訪れていた。

宗一『ん？ここか。』

そして扉を開けた。

????『ん??』

宗一『あの．．．。』

????『何でしょうか?』

一人の女性が機会を弄っていた。

宗一『見てもらいたいモノがありました。』

????『見せてもらっても?』

宗一『はい、友人のデバイスです。今は医務室で寝ていますが、  
損傷がひどそうなので。』

????『分かりました。お預かりしますね。』

宗一は女性にフレアを渡した。

宗一『明日休みだと聞いたのですが、無理ならいいですからね?』

????『私に休みはありません!年中無休です!ところで貴方、見  
ない顔ですね。新人さん?』

女性が問いかけて来る。

宗一『ああ、高峰宗一。よろしく。』

????『私はシャリオ・フィーニ。みんなはシャーリーって呼ぶか  
らそつちで。』

宗一『よろしく、シャーリー。デバイスよろしくお願いします。』

シャーリー『お任せあれ。』

二人は握手した。

シャーリーにフレアを渡した後、宗一は夕飯を食べ、自室にいた。

宗一『ふわぁ、明日楽しみだな。よし！明日のために今日は寝よう。』

そして宗一は眠りについた。休日を楽しく過ごすために。

く休みく（後書き）

長いのか???

よく分からないね!!

次回『く休日の幸せく』お楽しみに!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2520x/>

---

魔法少女リリカルなのは 零の軌跡

2011年11月29日23時52分発行